

西夏の興起

して康兆を斬り、開京開京 遼城府を抜き、次で又北境の數州を得んと、して高麗を攻めたり。是に於てか顯宗は復援を宋に求め、一〇一四年、數、遼と勝敗を争ひしが、遂に其敵すべからざるを知りて之に降を請へり。

第五節 是時に當り宋の西邊に一大強國起れり、西夏即ち是なり。唐末黨項の拓跋思恭兵を起して黃巢を討じ、功を以て李姓を賜ひ、定難の節度使となりて夏州陝西 綏德府に治せしが、子孫相次ぎて五代に臣事し、李繼捧に至りて宋に入朝せり。然るに族弟李繼遷は銀州陝西 綏德府に據り、或は遼に降りて夏王に封ぜられ、或は宋に附きて節度使となり、叛服常ならず、其子德明も亦宋遼兩朝に臣事し、然も本國に於ては帝と稱しき。子元昊嗣立するに及び、一〇三二年、文武官を置き、蕃漢學を立て、自ら蕃書を製して國人に教へ、回鶻を撃ちて盡く河西の地を取り、今の陝西甘肅の北境及内蒙古の西南部を有して興慶甘肅 寧夏府に都し、自ら大夏皇帝と號せり。時に宋は仁宗帝禎位にあり、韓琦范仲淹

宋と遼夏との關係

を用ゐて西邊守禦の任に當らしめ、僅に西夏の南進を妨ぐるを得たり。

第六節 遼の興宗帝宗眞聖宗は宋の西夏と難あるに乗じて關南の地を求めしかば、富弼使者となりて遼に至り、反覆論難して地を割くを拒み、遂に絹十萬匹、銀十萬兩を増すべきを約して通交を恢復するを得たり。一〇四二年、翌年宋は又西夏と和し、銀綺絹茶二十五萬を贈り、李元昊を冊して夏國主とせり。かく宋は歲幣を二國に致すも、夏に對しては賜と云ひ、遼に對しては納と云ひき。

第七節 交趾は黎桓の死後國內亂れ、豪族李公蘆自立して王となり、都を大羅河内に定め、好を宋に通じ、又眞臘暹羅を降ししが、長子徳政繼ぐに及び、更に眞臘の叛を平げ、又占城を征して大に之を破りぬ。時に儂智高なる者あり、安德州嶺南 邕州に據りて大南國を建て、或は交趾を侵し、或は宋の南境を擾しければ、仁宗は將を遣りて之を平げしめ

宋と交趾大南との關係

たり(一〇五三年)。

第十三地
圖参照

慶曆の黨
議

第三章 朋黨の軋轢

第一節 宋は國初より黨派の争ありて大臣の交迭頻繁なりしが、仁宗に至りて最も甚しく、一は韓琦、范仲淹、富弼、歐陽脩等を首領とし、一は夏竦、王拱辰等を首領とし、兩黨内閣に出入すると二十年間凡そ十七回に及べり。是を慶曆當時の年號の黨議と云ふ。然れども韓琦、范仲淹の黨概ね勝を制し、慶曆以後は賢臣朝に滿ち、國內平穩なりしと雖も、吏治愉情にして兵備振はず、宋の威徳は卒に漢唐の盛時に及ぶ能はざりき。

第二節 仁宗より二傳して神宗帝頊に至り、遼夏を攘ひて中國を一統せんと欲し、王安石を參知政事に任じて、先づ富國を計れり。是に於て安石は制置三司條例司を立て、青苗、均輸、預買、保甲、保馬、募役、市易

王安石の
新法

新法の弊
害及非難

方田均稅の法を行ひ、又科擧の法を改めたり。是を新法と云ふ(一〇六九年—一〇七二年)。

新法は悉く誹議すべきものに非ざれども、之を行ふに其人を得ず、且つ祖法に違ひ、民情に乖けるを以て上下之を不便とし、富弼、司馬光、蘇軾、程顥、歐陽脩の徒交、起ちて新法を駁論し、皆其職を罷められき。然れども怨議愈起り、帝も亦新法を疑ふに至りしかば、安石は其黨韓絳、呂惠卿を薦めて自ら位を去りしも(一〇七四年)、一年ならずして再び朝に入り相たると二年にして致仕し、其黨代りて政を執れり。是を以て新法は依然として續行せられぬ。

神宗の外
交

第三節 かく神宗は新法を施行すると共に兵を内外に出し、五溪湖南辰州府を平げ、瀘夷四川瀘州府を降し、又西夏を襲ひて、綏州陝西綏州府を取り、吐蕃を撃ちて熙河路甘肅蘭州府を置き、次で河東路沿邊の戍壘を増修し、舖舎を起して遼の界内に侵入し、又深く高麗と結びて漸く遼に逼ら

んとせり。是に於て遼の道宗帝洪基は使を宋に遣して成壘の毀撤と境界の確定とを求め、宋は東西地を失ふと數十里なりき(一〇七五年)。是歲交趾の李德政の子乾德は兵を出して廉州廉州府、邕州邕州府等の諸州を侵略したりしも、宋軍の占城真臘と計を通じて來討するに及び、和を請ひて俘囚を返還しぬ。時に西夏は李秉常位にあり、宋軍の靈州靈州府を圍めるを撃退し、尋で永樂城永樂城を陥れ、宋軍死する者多し。是に於てか帝は始て征伐の念を止め、西夏も亦困弊して好を宋に通ぜり(一〇八三年)。

元祐の更化

第四節 神宗内は法度を變更して富國を計り、外は四夷を攘斥して國威を振張せんと企てしが、卒に一事の意の如くなるなくして崩じ、子哲宗帝煦嗣立せり。然るに帝は年尙幼かりしかば、太皇太后高氏政を攝し、司馬光呂公著を擧げて宰相とし、章惇呂惠卿等を貶竄して悉く新法を廢止せり。是を元祐元祐の更化と云ふ。已にして司馬光薨



蘇軾書

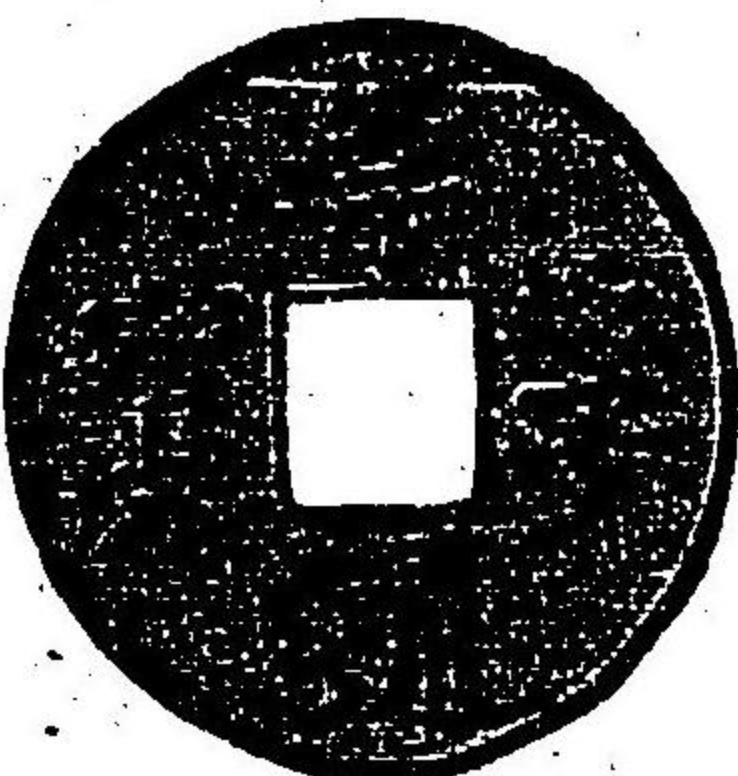
じ、其派分れて三となり、洛黨は程頤を、蜀黨は蘇軾を、又朔黨は劉摯王巖叟を首とし、政論の異同に交ふるに學說の異同を以てして互に相攻め、新法派は之に乗じて頻に朝政を誹義せり。

紹聖の紹述

第五節 太皇太后政を聽くと九年、至公を以て國を治め、兵備を嚴にして遼夏に對し、爲に女中の堯舜と稱せらる。后崩じて哲宗親ら政を視るに及び、再び章惇を相とし、其黨蔡京蔡卞等を要地に置きて漸く諸新法を恢復し、元祐諸臣の罪を治めて虚日なかりき。是を紹聖紹聖の紹術と云ふ。

徽宗帝の昏徳

第六節 徽宗帝信嗣立するに及び、章惇蔡京等相次ぎて貶竄せられしと雖も、帝意もと新法を紹述するにありしかば、蔡京復入りて相となり、政を



崇寧通寶 徽宗皇帝三年所鑄 (一一〇四年)

西夏と遼

擅にすること前後二十年に亘り、重ねて新法を行ひて悉く反対派を排斥し、帝に勧めて奢侈に耽らしめ、又荐に土木を起して民力を涸らせり。

西夏は李秉常の子乾順に至り、已に宋と和したるに關らず、屢、邊境を侵擾し、吐蕃も亦其援を得て叛せり。因て蔡京は内侍童貫を遣りて吐蕃を征服せしめ、湟、鄯、廓三州皆甘肅西寧府の境内にありを復しぬ(一一〇四年)。又遼は道宗の代宗室を誅除し、忠臣を斥逐してより、諸部反側して兵革歲ごとに動き、天祚帝延禧に至りて益、衰へたり。

第四章 遼の滅亡

第一節 かく南北の末運に際し、東胡の別種なる女真族チンギス新に遼の東方に起れり。女真の先を黒水靺鞨と云ふ。粟末靺鞨の渤海を建つるは及び之に役屬せしが、契丹の渤海を滅すに至り、分れて二となり、混

第十三節
第十二節
第十四節
四地圖卷
女真の勃興

同江

宋金の連合

宋金の連合

同江今江松の西南に居る者は籍を契丹に入れて熟女真と云ひ、混同江の東に居る者は契丹に臣屬するのみにて生女真と云ひしが、其後遼帝興宗の諱を避け、眞を改めて直と爲せり。生女直は道宗の時完顔ウダハ烏古迺ウコノウの始て之が節度使となりしより兵勢漸く強く、孫阿骨打ウコウに至り、遂に遼に背きて帝と稱し、國を大金と號しぬ。是を太祖武元帝と爲す(一一一五年)。太祖屢、遼軍に勝ち、東京道の諸州縣又熟女直を降し、勢益盛なりければ、遼の天祚は和を金に請ひしかど議遂に成らざりき。

第二節 宋の童貫は既に吐蕃に勝ちてより、遼も亦圖るべしとなし、李良嗣の策を納れ、金と通じて遼を挾撃するの議を建てたり。是より宋金交通の事起りて、使者互に往來し、太祖は遼の上京を陥れて宋使李良嗣に其武を示し、約して曰く、金は遼の中京大定府直隸承德府を取

り、宋は南京析津府直隸順天府を取るべく、事若し成らば宋は南京附近の諸州を收め、金は宋の從來遼に贈りし歳幣を受くべしと(一一二〇年)。

南京の陥落

第三節

かくて金は先づ兵を出し、中京及西京大同府山西大同を陥れて天祚を逐ひしかば、南京の守護耶律淳は新に立ちて天錫帝と號し、耶律大石を擧げて軍事を統べしめぬ。時に宋の童貫は大擧して南京を伐つと二回なりしも、共に耶律大石の爲に撃退せられて約の如くなる能はず、密に金の援を請ひしかば、太祖は居庸關直隸順天府昌平州の西北より南京に入り、遼の群臣は表を奉じて出で降りぬ(一一二二年)。是より先き金は宋の出兵の期を失せるを責めて約を渝へんとを迫りしが、既に南京に克つに及び、南京の租税は當然金の收むべきものなりと主張せり。因て宋は歲幣四十萬の外に代税錢百萬緡及糧二十萬石を與ふるを約して南京及薊、景、檀、順、涿、易六州を得たれども、其地の金帛子女は皆既に金人に掠められ、童貫は唯空城を得たるのみなりき。

遼の滅亡

第四節

時に天祚は金軍に逐れて雲内内蒙古烏蘭特部の西北に居りしが、夏主李乾順の招に應じて南黄河を渡りぬ。尋で太祖崩じて弟太宗帝吳乞

西遼の興起

買立つに及び、西夏は使を金に遣りて藩と稱しければ、天祚は復黄河を渡りて東に遷り、更に党項に奔らんとして途に金兵に獲られたり(一一二五年)。

第五節

是歲耶律大石は中央亞細亞に西遼即ち黑契丹カフカスを立て關兒汗カンとなりて天祐帝と號しぬ。是を西遼の德宗と爲す。初め鶴悉那のマームードは呼羅珊地方を領してサルタンとなり、屢兵を信度河畔に出して回々教の擴張を圖り、バシジフ地方を蹂躪して更に恒河ジマムナ河の水域に及びしが、歿後(一〇三〇年)セルジューク土耳其族裏海の東濱より起り、西進して波斯を滅し、遂にサラセン帝國の政權を握りてエミール・アル・オムラと稱し、カリフをして唯教權のみを有たしめぬ。一〇七二年マレク・シャー出づるに及びイスバハンに都し、西は東羅馬帝國とタウロス山に境を交へ、東北は捕喝薩末犍に至り、國威頗る盛なりしが、マレク・シャー死して其廣大なる版圖は忽ち分裂し、波斯

ケルマン、シリア、ルーム即ちイユニウム等の數サルタン國となれり
(一〇九二年)是に於て耶律大石の兵を率ゐて西に奔るや、別喇薩軍の
王は國を棄て、遁れ、大石之に代り、都城を吹河上に建て、虎思幹耳
朶と名け、兵を出して黠戛斯康里を従へ、又波斯と戦ひて花刺子模の
地を領し、中央亞細亞の最強國となりぬ。

第十三地
圖参照

汴京の陥
落

第五章 宋金の和戦

第一節 遼滅びて金宋境を接するに至り、金の南侵の念愈強かり
しが、會金の叛人の遁れて宋に投ずるありしかば、太宗は機に乗じて
兵を兩路に出し、一は西京より太原に進み、一は平州直隸永平府より南京附
近を侵掠して中山直隸州に入れり。是に於て徽宗は兵を四方に徴し、ま
た己を罪して位を欽宗桓に禪り、欽宗は蔡京童貫等を誅竄し、使を金
に遣りて好を求めたれども成らず、金の西軍は太原を圍むと愈急に、

東軍は黄河を渡りて汴京を圍めり。欽宗和を請ひ金二十萬兩銀四百
萬兩を出し、中山、太原、河間の三鎮を割き、且つ弟康王構少宰張邦昌を
質として金に赴かしめたり(一一二六年)。

已にして金軍復兵を兩路に分ちて來侵し、一は眞定直隸正定府を陥れ、長
驅して汴京に抵り、一は太原洛陽を陥れて同じく汴京を圍み、遂に欽
宗徽宗を執へ、張邦昌を立て、楚帝とし、城中の子女金帛を掠めて北
に還りぬ(一一二七年)。

宋室の南
渡

第二節 張邦昌宋人の服せざるを知り、康王構を迎へて帝位を嗣
がしめたり。是を高宗帝と爲す。高宗怯懦にして金軍と戦ふを避け、揚
州江蘇揚州府に幸し、鎮江江蘇鎮江府に奔り、遂に杭州浙江杭州府に如けり。是を宋室の南
渡と云ふ(一一二九年)。尋で金軍更に大舉して南下し、江を渡りて江西
江東諸軍を破り、高宗を明州浙江寧波府に逐ひ、杭州を焚掠し、更に西して宗
軍を富平陝西富平縣に破り、陝西の地を得て悉く之を齊帝劉豫に與へき。

秦檜の和議

迪古乃

劉豫はもと宋の臣なり、金に降りて國を齊と號し、汴京に都したりしが、是に於てか金人と共に屢宋を侵しぬ。時に宋は韓世忠、吳玠、岳飛等の名將ありて連に金齊の軍に克ちしかど、宰相秦檜斷然として媾和を主張し、諸將を貶竄し、岳飛を殺し、東は淮水を界とし、北は唐州河南府唐縣を界とし、西は大散關陝西鳳翔府寶雞縣を界とし、且つ每歲銀絹二十五萬兩匹を貢するを約して和を結べり(一一四一年)。

第三節

是より先き金は太宗崩じて熙宗合刺立ち、劉豫を廢し、多く宗室を誅滅したりしかば、從弟迪古乃帝を弒して自立し、上京會寧府の一隅に僻在するを厭ひて都を南京に遷し、中都大興府と改稱し、又上京北京の號を削り、中京を北京となし、汴京を南京となし、東西二京は遼の舊に依れり。かくて帝は宋を滅して一統の業を開かんと欲し、大に兵備を治めて汴宮に移り、一一六一年遂に盟に背きて宋を侵ししも戰利あらず、會從弟烏祿の遼陽に自立せりと云ふを聞き、北に

南北少康

還りしが、遂に諸將の爲に弒せられて烏祿位に即けり。是を世宗帝となす。

第四節 秦檜金宋の和を結びてより人の己を議するを恐れ、文字の獄を起して反對者を傾け、高宗はたゞ成るを仰ぐのみなりしが、已にして秦檜病死し、高宗は位を孝宗春に譲りぬ。孝宗銳意恢復を圖り、諸將を遣りて北伐せしめしも利あらず、因て復和を結び、始て君臣の關係を絶ちて叔姪の關係とし、歲幣銀絹各五萬を減ずるを得たれども、地界は猶熙宗の時と同じかりき。是時に當り金宋共に名主を戴き、南北相和して各其國を治め、生民此に由りて休息を得ると三十餘年に亘れり。

韓侂胄の專恣

第五節 孝宗より二傳して寧宗に至り韓侂胄擁立の功を恃みて政柄を握り、趙汝愚、朱熹等を竄逐し、目するに僞學を以てせり。時に金は世宗已に崩じて章宗麻達葛立ち、内は佞幸の政に預るあり、外は蒙

古の北邊を擾亂するありて紀綱大に紊れしかば、韓侂胄は機乗ずべしとし、大兵を擧げて北伐せしも皆破れ、金軍却て九道より宋を侵撃せり。因て宋廷は侂胄を殺し、歲幣を増して三十萬兩匹とし、犒軍銀三百萬兩を出し、又叔姪を改めて伯姪と爲し、以て和を結ぶを得たり（一二〇八年）。

西夏高麗
交趾の形勢

第六節 西夏は李乾順の時金に臣附してより、唯一隅に據守するに過ぎざりしが、三傳して李安全に至り、蒙古軍の來侵を被り、國勢益衰へたり。高麗は顯宗以來宋遼兩國に通じたりしが、遼滅びて金興るに及び、又金に朝貢せり。然れども五代以來高麗は其實獨立の状態にて、諸制多く天子の制に倣ひ、文學技術等も頗る發達せり。又交趾は李乾德より二傳して李天祚に至り、國大に富み、南洋諸國、緬、暹等は屢來りて之と互市を試み、宋の孝宗の封を受けて安南國王となれり。然れども王の歿後庸主相次ぎて國政大に紊れ、外は占城宋の邊疆を侵す

日本と高麗遼宋との交通

あり、内は諸豪族の王位を覬覦するありて紛亂絶ゆる間なく、李氏倒れて陳氏之に代りぬ（一二二五年）。

第七節 高麗は新羅を滅して後猶我國と貿易を試みしが、其一部の刀伊は女眞と共に筑前に來寇したるとありき（一〇一九年）。宋と我國との貿易も亦盛に行れ、且つ宋は頻に我國に修好を求めしも、書辭常に倨傲不遜なりければ皆却けられたり。日本はまた遼と貿易を行ひしが、遼滅びて金起り、宋室南渡するに及び、平清盛は兵庫港を修めて日宋間の貿易を興し、鎮西諸津は彼我の船舶相交りぬ。此間僧侶の宋に遊學する者絶えず、我國の茶は實に榮西の宋より傳へたるに始れり。

第六章 宋代の文化

第一節 秦漢以後儒學は徒に章句訓詁の學となりしが、宋に至り

性理學

て一變し、始て窮理の學となり、幽元なる哲學的組織を備へて大に先儒未だ言はざる所を發せり。蓋し魏晉以來道佛二教の流布已に久しく、學者徃々之を研究し、遂に性命理氣の說を創めて以て佛教に對するに至りしなり。

邵張二程

宋代儒學の盛なるは仁宗の時に始り、濂溪の周敦頤字和甫共城の邵雍字堯夫實に其先鋒たり。二氏の學はもと



熹 朱



頤 程



顥 程

雍字堯夫實に其先鋒たり。二氏の學はもと道家陳搏より出でしが、敦頤は是に由りて無極太極の說を演じ、通書及太極圖說を著し、雍は是に由りて天地の消長を推論し、皇極經世を撰めり。次で程顥字伯淳程頤字正叔の兄弟出で、周氏の說を祖述し、一は定性書を著して明道先生と稱せられ、一は易傳及春秋傳を編みて伊川先生

と稱せられたり。時に關中に張載字子厚あり、洛陽の二程と相對して盛名を競へり。是より學者各、その所見を逞しくし、派を分ちて相争ひ、所謂洛黨、蜀黨、朔黨の目ありき。

朱熹と陸九淵

宋室南渡後蜀朔二黨並び衰へて程子の學獨り行れ、閩中の朱熹字晦元に至りて遂に之を大成しき。其學敬に居りて理を窮むるを要と爲



淵 九 陸

し、欲を去り性に反るを以て主とせり。故に是を道學又性理學と云ふ。著述頗る多く、易本義、詩集傳、四書集註、小學近思錄、通鑑綱目等あり。同時に江西に陸九淵字子靜あり、象山先生と稱す。兄九齡と共に別に一派をなし、徳性を尊ぶを以て主となし、學は悟入にありと

説き、以て朱熹の間學を本と爲すに反し、二派毎に相争へり。金は中原に據ると百餘年、文士乏しからずと雖も儒家としては僅に趙秉文あるのみ。次で蒙古起るに及び、程朱の道始て河北に入り、宋既に滅ぶも

史學

宋學は益流行せり。

第二節 宋は國史院を置き、日々時政を記せしめたり。是を日曆と云ふ。當時史學は頗る發達し、宋祁、歐陽修の新唐書あり、薛居正の五代史、歐陽修の新五代史あり、司馬光が政治の沿革を主として編纂せる資治通鑑は事實文章頗る見るべく、馬端臨の文獻通考は歷代の制度典章を知るに缺くべからざるの良書たり。又本草學は醫學と併行して獨立の一學科となり、唐以來之を講習するもの漸く多く、著書の世に出づるもの少からざりき。

詩文

第三節

宋初は五代の弊を受けて詩文共に浮靡の習を脱せず、殊に詩は西崑體として徒に精緻華巧を主とせるもの、み行れしが、歐陽修永字は出づるに及び、梅堯臣聖字は等と共に力めて西崑體を排し、又痛く時文を抑へて古文を復興し、門下に曾鞏字は、王安石字はの徒を出せり。次で蘇洵明字は、蘇軾子字は、蘇轍子字はの父子あり、世に之を三蘇と稱す。

書畫

蘇洵の文は奇峭雄拔にして頗る先秦の風を有し、蘇軾の文は行雲流水の如く、又詩を善くして門下黃庭堅字はと併稱せられたり。凡そ後世宋の詞藝を論ずる者、文に於ては歐陽、三蘇、曾、王を推し、或は之に韓、柳を加へて唐宋の八大家と稱し、詩に於ては歐、梅、蘇、黃を推せり。南宋に至り理學の流行に由りて詩文はやゝ衰へたるも、猶文には李綱、王十朋、葉適、詩には范成大、陸游の輩あり。而して金は太祖の完顏希尹に命じて女直字を製せしめ、所在に文學の士を訪求してより、其文物の盛なるは遙に遼に勝り、詩文は格力遼勁にして北宋に近く、殊に元好問字はの如きは學才雄贍にして金元兩代の第一位に居れり。

第四節

宋朝第一の畫家を李公麟字はとし、第一の書家を蔡襄とす。公麟佛像を畫きては吳道玄を追ひ、山水を畫きては李思訓の如く、人物を畫きては韓滉に類し、其瀟洒たるは王維に似たりと云ふ。太宗黃庭堅は書を善くし、徽宗釋巨然是畫に巧に、蘇軾米芾字はは書

佛教

畫兩道に達しき。

第五節 佛教は五代の末に至りて一旦衰へしが、宋の太祖位に即くに至り、廢寺を修め、僧侶を印度に派し、大藏經を印行し、又經論の翻譯を命ずる等の舉ありしより、教勢再び振ひ、十一世紀の初には僧尼の數四十六萬に上り、三論、法相、華嚴、律、天台、真宗、禪等の諸宗並び立てり。此中禪宗は懷璉、慧龍等の諸名僧出で、最も流行し、當時の鴻儒碩學大抵之が影響を被らざるはなかりき。又淨源は華嚴宗中興の祖として名あり。

道教

道教は眞宗帝の老子に尊號を加へ、道士に先生の號を賜ひて之を尊崇したりしより、爾後の諸帝殊に徽宗の如きは力を盡して之が興隆を計り、道士學を立て、道學博士を置き、又道史を編纂せしめたり。然れども南宋以後、道佛二教共に衰へ、僧尼に勅して丁錢を納れしめ、或は僧牒を賣りて軍費に充つるに至れり。

第三編 近世史

第一期 蒙古の勃興より歐人の東漸まで

(紀元一二〇六年—同一五一七年)

第一章 蒙古の勃興

第一節 黒龍江の上流に幹難、客魯邁の二支流あり、蒙古は實に此

間に遊牧せる種族にして、唐の室韋の一部なり。世貢を遼金に納めたりしが、也速該出づるに及びて漸く近隣諸部落を併呑し、其子奇渥温鐵木眞に至り、更に兵を用ゐて西は蔑里乞、泰赤烏、又黠戛斯の後なる乃蠻を降し、東は塔々兒を滅し、南は汪古即ち白達々、克烈を平げ、遂に幹難河上に即位して成吉思汗と稱せり。時に一二〇六年なり。

第二節 かくて成吉思汗は西夏を征して其主李安全を降し、畏兒を併せ(一二〇九年)翌年始て金を侵し、今の直隸、山西、山東の各

第十四節
十三地圖
參照

蒙古の勃興

西夏金の衰微

地を席捲して中都燕京天祚に向へり。時に金は世宗の孫宣宗吾睹補位にあり、蒙古のクリルタイ會議を設けて諸族を統一せるに反し、宗室大臣を斥けて頗る民怨を買へり。宣宗到底新興の蒙古に敵すべからざるを知り、公主金帛子女を納れて和を請ひしかば、成吉思汗は一且軍を旋し、も已にして宣宗の都を汴京に徙せるを聞き、再び南征して燕京を降し、耶律楚材を得て臣と爲し、更に別軍をして汴京附近を抄掠せしめたり(一二一五年)。是より金の地日に蹙り、其境城北は眞定を保し、東は河に抵り、西は潼關に阻するのみ。

第三節 是より先き乃蠻の大陽汗の子屈出律は蔑里乞の主脱脱と共に西に走りしが、成吉思汗の西夏を代つに際し、大に之と也兒的、石河畔に戦ひて敗れ、脱々は戦死し、屈出律は西遼に投じたり。時に西遼は徳宗の孫直魯古位に在り。東よりは畏兀兒西よりは花刺子模の爲に、連に其地を蠶食せられ、屈出律遂に其王位を篡ふに至れり(一二

屈出律

西遼の滅亡

一一年頃。次で屈出律は復蒙古軍と戦ひて敗れ、巴達哈傷今の地カに奔りて捕へられ、蒙古の西境は花刺子模と相接するに至りぬ。

奴隸朝

第四節 一一八六年ゴルの阿富汗人は哥疾寧今の地カの土耳其人を

滅し、更に印度北部を征してベナーレス地方に及びしが、十三世紀の初に至り急に衰頽に傾き、デルヒの梭里檀クタブウド・ヂン新に獨立王國を立て、勢威遙にブラマプートラ河に及びり。是を奴隸朝(一二〇六年—一二八八年)と云ふ。花刺子模は實にこのクタブウド・ヂンが建設にかゝり、西遼の盛時には其屬國たりしが、梭里檀黙時出づるに及び、屈出律と謀りて之を滅し、尋で撒麻耳于今の地カゴルを併せ、其版圖東は信度河より西は寛甸今の地カ吉思海今の地カに至り、北は垂河より南は波斯灣に及びり。

花刺子模の興起

花刺子模の滅亡

第五節 蒙古の使者隊商の花刺子模に赴きて殺さるゝや、二國の平和茲に破れ、成吉思汗は求赤察合台今の地カ窩濶台今の地カ拖雷の四子及哲別、速不台の二將と共に大兵を率ゐて首府和林を發し(一二一八年)也兒的、石

河を渡りて垂河に達し、兀提刺兒にて兵を四路に分ち、察合台窩濶台は兀提刺兒を陥れ、河に沿ふて益西し、成吉思汗は拖雷と共に不花刺撒麻耳子を抜き、更に哲別速不台をして黙時を追はしめ、又拖雷を波斯に遣りてホラサン也里エリハラを屠らしめ、自ら黙時の子札刺丁チハラクチンを追ふて哥疾寧の近傍に至り、信度河の彼岸に之を追ひ、其近地を征服して東歸の途に就けり。

蒙古阿羅思を侵す

黙時は連戦利なくして裏海の一島に逃れしかば、哲伯速不台の二將は其踪跡を失ひ、裏海の西に沿ふて北進し、アヂェルバイヤン谷アヂェルバイヤン兒只エリヂを征服し、太和嶺タハルン山脈シヤンを踰えて阿蘭を破り、ボロヂツイ即ち金察を伐ち、又之を助けたる阿羅思アロス諸侯の軍を破り、哥力米カクミに至りて還れり。

西夏の滅亡

第六節 一二二五年成吉思汗の和林に凱旋するや、また直に兵を出して西夏を攻めて之を滅し、更に進みて金を侵せしが六盤山カクパシヤン昌府チヤンフを

第十三節 第十四節 地圖参照 金の滅亡

に至り病を獲て死せり(一二二七年)。遺命により四子其版圖を分領し、長子朮赤は今のキルギス荒原より阿羅思に至る間の地を得て欽察國の基をなし、次子察合台は西遼の故地を得、三子窩濶台カクワカは乃蠻の故地を得て帝位を継ぎ、末子拖雷は蒙古の本土トウを領したりき。

第二章 金宋の滅亡

第一節 金は宣宗の子哀宗帝寧甲速に至り士風愈優柔にして國勢益衰へ、窩濶台の拖雷と共に來侵するや、鳳翔フヤウシャウ河中カクワカ相次で陥り、潼關藍田關の成も亦皆潰えき。因て哀宗は質子を出して和を請ひしも、幾もなくして、二國の和復破れ、蒙古は宋に通じて金を挾撃せんとを約したり。會汴京糧盡きて哀宗蔡州サイシュに走りしが、蒙古宋兩軍の包圍する所となり、自剄して死し、金遂に滅びぬ(一二三四年)。

第二節 翌年窩濶台はクリルタイを開きて歐洲侵略の議を決し、

征 拔都の西

求赤の子拔都を以て元帥とし、蒙哥、貴由、潤端、海都及速不台等をして之を助けしめたり。かくて蒙古軍は進て不里、阿里を滅し、阿羅思に入りて也烈、贊府、モスクワ府を陥れ、ウラヂミールを取り、更にノヴゴロフドに向ひて行軍せしが、地勢の利ならざるを見、西南に轉じて乞瓦を抜けり（一二四〇年）。是より海都は波蘭に侵入し、シレジエンに進み、シレジエン侯ハインリヒ及チュートン騎士の軍をウールスタットに破り、モルダヴィアを過ぎて曩に匈牙利に向ひし本軍に會し、拔都等は尋で馬茶を陥れ、別に一隊の軍を派して、塊地利のノイスタットに到らしめき。是に於て歐洲諸國震駭し、羅馬法皇は飛檄して將に十字軍を起さんどせり。然るに會、窩濶台の計至りしかば、拔都は軍を旋し、亦的勒即ちチルガ河下流の薩來に都して、欽察一に金黨國を建て（一二四三年）、其境域東は垂河より西はカルバチア山脈に及び、拔都の兄幹魯朶は別に其東方に白黨國を建てたり。

蒙古宋の
交戦

第三節

金の滅ぶるや、宋は勢に乗じて北方を恢復せんと欲し、兵を出して汴京、洛陽を略取せり。是に於て南北の平和忽ち破れ、淮漢の間復寧日無かりしが、既にして窩濶台崩じて貴由宗定立ち、貴由尋で崩じて蒙哥憲立つに至り、東は高麗を征し、南は太弟忽必烈をして大理吐蕃を伐たしめ、其將兀良合台ウラハカタイをして交趾を平げしめ、西は弟旭烈兀をして波斯、小亞細亞地方を蹂躪せしめたり。時に宋は理宗帝昀久しく位に在り、賈似道權を專にして國勢頗る衰へしかば、蒙古は三道より宋を侵し、蒙哥は弟阿里不哥を留めて和林を守らしめ、親ら軍を率ゐて合州四川重慶府合州に至り、忽必烈は鄂州湖北武昌府を圍み、又兀良合台は大理より來りて潭州湖南長沙府を攻めたり。賈似道鄂州を援ふ能はず、密に使を忽必烈に遣り、臣と稱して地を割き幣を納れむとを請ひしが、會、蒙哥崩じて阿里不哥自立せりと聞き、忽必烈は遂に其請を許し、和林に還りて帝位に即けり。是を世祖皇帝と爲す（一二六〇年）。忽必烈、阿里不哥

旭烈兀の西征

と相争ふ五年にして之を降し、都を燕京に定めて國を大元と號しき。

第四節 初め窩濶台の時札刺丁はデルヒの援を得て花刺子模の舊土に歸りしが、蒙古兵と戦ひて敗れ、遂に土民の爲に殺されたり。其頃波斯はイスマイル派一に暗殺派と稱せる回々教徒の手中に歸し、八吉打は依然として哈里發の治下に在りしも、僅にサラセン帝國の餘命を保つに過ぎざりき。因て旭烈兀はクヒスタンを攻めて暗殺派の教主ロクン・エドナンを降し、八吉打を屠りて哈里發モスタシムを降し(一二五八年)更に進みてアレポ、的迷失吉を取り、迷思耳即ち埃及に向ひしも、マメリークに沮まれて北に轉じ、アルメニア、アナドリアを略し、遂にタプリスに都して伊蘭國を建てたり。又此頃デルヒに都せる奴隸朝は屢、蒙古軍の侵略を被りき。

宋の滅亡

第五節 宋は理宗崩じて姪度宗帝繼立ち、蒙古と戦ひて樊城湖北襄陽府を失ひ、其子帝焜に至り、更に揚子江沿岸の諸城を失へり。因て

帝焜は賈似道を貶けて勤王の師を徵し、文天祥、張世傑等の兵を率ゐて入衛するありしも、蒙古の將伯顔バヤンの臨安に迫るに及びて降を請へり(一二七六年)。是に於て皇兄端宗帝焜は福州福建福州府に據り、力めて宗室の恢復を謀りしも、元軍の追撃愈急なりしかば、海に航して西に走り、遂に礮州島廣東高州府吳川縣の南に崩じ、其弟衛王昺は崖山島廣東崖州府新會縣の南に據りしも、元軍の水陸より侵し來り、文天祥を擒にし、又崖山を破るに及び、帝は海に投じ、張世傑は交趾に走らんとして、遂に死し、宋室全く滅亡せり。時に一二七九年なり。

第三章 元初の外征

第一節 元の世祖の宋を滅すや、勢に乗じ高麗王元宗を介して我國を招諭せり。是より先き高麗は權臣政を專にして篡弒相繼ぎ、契丹の遺種は南下して大同江を渡り、國を立て、大遼と號し、女直の遺種

第七第十
四地圖參照

元と高麗

は遼東に據りて東眞と號せり。時に高麗は高宗王厓位に在り、東眞蒙古と結びて漸く契丹を討平するを得しが、尋で高宗の其臣林衍の爲に廢せらるゝに及び、當時蒙古に質たりし太子僂は蒙古の援を得、林衍を滅して王位に上りぬ。是を元宗となす。是より高麗は全く蒙古の一屬邦の如く、和州成鏡道永興府及慈悲嶺黃海平安兩道以北の地は蒙古の版圖に歸しき。

元寇

第二節 一二六八年以來、元は屢使を我日本に送りしが、日本は之に應ぜざるのみか、却て其使者を斬り、又元軍の對馬壹岐を屠りて筑前に寇せるを管崎に防ぎて大に之を破れり(一二七四年)。是に於て世祖は征東行中書省を高麗に設け、元宗を以て左丞相とし、着々軍備を整へ、遂に元兵十萬、高麗兵一萬、戰艦四千艘を派し、壹岐を取り、博多に向ひしも、我軍能く防ぎて上陸する能はず、偶、颶風大に起りて戰艦沈没し、元兵生きて還れる者僅に三人と云ふ(一二八一年)。史に文永弘安

緬甸安南占城の征服



の元寇と云ふもの是なり。元の敗績と日本の富强とは當時世祖に仕へたるマルコ・ポロ(孛羅)の紀行によりて歐洲諸國にまで知られたりき

第三節 緬國即ち緬甸は大理の南にあり。夙に印度恒河河畔の地と交通を有し、十一世紀より十三世紀に亘りて國勢頗る振ひ、國都バガンに於ける建築物は今日に至るも猶存せり。然るに元の大理を平げたる後使を遣して之を招降するや、國王タリク・ビエーメン敢て命を奉ぜざりしかば、世祖は乃ち兵を派して之を討平せしめたり。

是より先き安南は陳氏の祖陳照の時、占城の來侵を撃退し、又兀良合台と戦ひて互に勝敗ありしが、遂に朝貢の約をなし、占城眞臘と共に元の封爵を受け、元は安南行中書省を置きて三國を統御しき。然るに陳照の孫昤の代、占城其險遠を頼みて元の命を奉ぜざりしかば、世祖は道を安南に假りて之を征せんとせしに、陳昤却て拒守の計をなし、元と戦ふと前後二回なりしが、~~元は~~焜立つに至り復元に入貢し、占城と婚してその二州を得たり。其後數年にして瓜哇も亦元の侵撃を被りぬ。是に於てか蒙古の版圖は前古に超越し、東は高麗に至り、西は黒海に及び、北はキルギスを包み、南は占城を極めたり。

海都八刺の離背

第四節 初め蒙哥の位に即くや、察合台窩濶台兩家の諸王皆不平あり。因て蒙哥は諸王を邊地に封じ、窩濶台の孫海都も亦金山の北に貶せられしが、崩後阿里不哥の世祖と位を争ふに及び、諸王は皆阿里不哥を助け、又其降後は海都を奉じて大汗としき。時に察合台國は八

大 伊蘭の盛

刺汗位に在り、世祖之に命じて海都を征せしめんとせしも、八刺は海都と結びて却て元の直轄地なる途魯其^{土耳其}を占領し、又欽察國の忙哥帖木兒汗と和して元に抗しき。一二六七年、然るに當時世祖は宋を滅し、日本に寇し、又南亞諸國を討平するに汲々たりしを以て、力を盡して海都と雌雄を決する能はず。海都は機に乗じて波斯に入り、伊蘭汗阿八哈と戦ひしも大敗せり。已にして八刺汗死して海都自ら察合台汗を任命し、之と共に磧西に侵入し、和林を襲はんとすると數回なりしが、毎に志を達せず。世祖の崩後一二九四年、幾許ならずして海都死し、子察八兒は元の成宗鐵木耳に降り、元は嶺北行中書省を和林に置きて漠北を統轄せしめたり。時に察合台國は八刺の子都哇汗位に在りしが、是より全く獨立しき。

第五節 伊蘭國は旭烈兀の子孫世位を襲ぎて元室に忠誠を致し、阿八哈より三傳して合贊汗に至り、内は法度を改め、外は迷思耳と戦

欽察の盛時

ひ、且つ回基二教を優遇して好を歐洲列國に通じ、國勢頗る盛なりき。欽察國は拔都の死後、子措里答及其叔父別兒哥相繼ぎて汗位に上り、大に基督教徒を虐待し、羅馬法皇アリサンドロ四世の十字軍を起して欽察を攻めんとするや、別兒哥は直に波蘭に入り、クラカウを陥れき。是より欽察は東歐諸國政治上の一主動力となり、又漸く歐洲の文明に浸染せしが、忙哥帖木兒の子脱々及其姪月即別に至り、埃及土耳其、莫斯科等と通婚し、國勢頗る盛なりき。

世祖の内治

第六節 世祖頗る意を内治に留め、官制を改め、諸官の長には必ず蒙古人を用ゐ、漢人の兵器私藏を禁じ、また文學を崇び、諸宗教を厚遇し、殊に佛教の一派なる喇嘛教を奨励し、其教主八思巴を以て帝師と爲せり。初め世祖は屢外國を征伐し、或は多く藩王に賜與したりしかば、漸く國用の不足を感じ、爲に聚斂の臣を用ゐて苛法を執行し、又交鈔即ち紙幣を發行しき。然るに其後新舊交鈔の引替を罷め、又毎歳多

交鈔

額の交鈔を濫發するに及び、物價騰貴して財政日に紊亂し、喇嘛教僧侶の跋扈と相表裏して以て元室の衰亡を招くに至れり。

第四章 元代の文化

元の人材登用



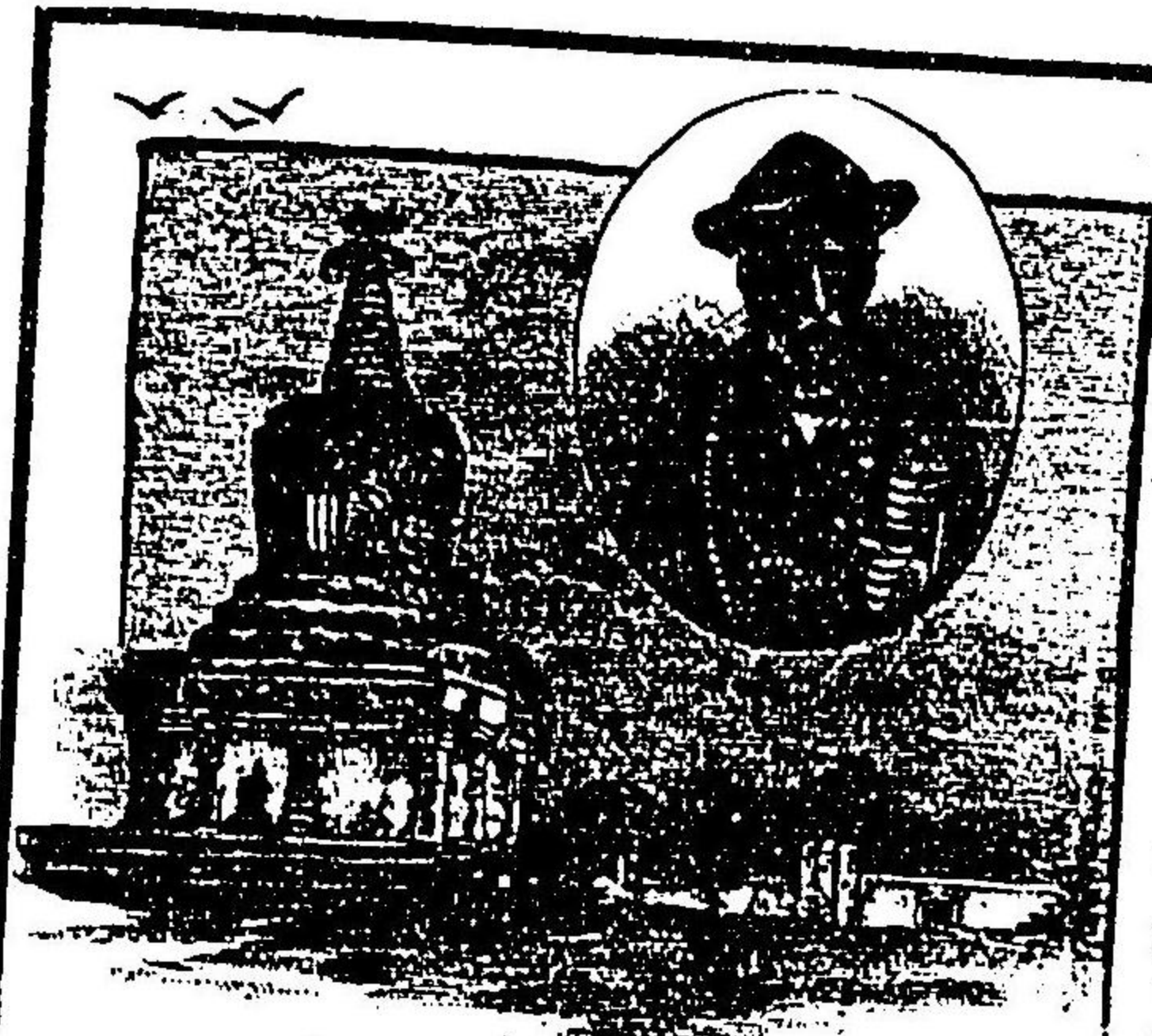
ルマコ

第一節 元は國初以來人を用ふるに國の内外を問はず、遼人耶律楚材の編輯所經籍所の總裁となり、伊太利人マルコ・ポロの樞密副使となり、西藏人八思巴の帝師となり、猶太人愛薛の翰林學士となり、畏兀兒人迦魯答思の太司徒となり、波斯人阿合馬の宰輔となりしが如し。是を以てその宋を滅して名儒趙復を得るや、漸く程朱の學を奨励し、許衡、吳澄の二大儒を生ずるに至れり。

第二節 元代詩文は観るに足るもの少く、僅に元好問一人あるのみ。然れども戯曲小説は元代に大成して以て明清に及べり。漢以後詩に樂府の一體ありしが、宋に至りて詞餘となり、元に至りて戯曲となり、南北の別ありき。南曲は高則誠の琵琶記を以て、北曲は王實甫の西廂記を以て白眉とすべし。小説には施耐庵の作と稱せらるゝ水滸傳七十一卷あり、結構文章共に千古に冠たりと云ふ。又史學には脱脱等

が編輯せる遼、金、宋三史あり、畫家には陳仲仁、顔輝、張嗣成あり、書家には趙孟頫、鄧文原、明の徒ありき。

第三節 世祖が土伯特制御の一策として用ゐし喇嘛教はもと祈禱禁咒を主とせる佛教の一派にして、七世紀の頃印度チベットより土伯特に傳來せしものなり。八思



塔寺の喇嘛外府天奉

喇嘛教

其他の諸教

巴以來帝師は歷代元室の崇信を受け、其宣命は詔敕と並行し、其派の僧徒は利を貪りて飽くなく、近侍に營結して布施を奏請し、元の社稷は遂に之が爲に傾くに至れり。

元の諸帝は歷世宗教に對して寛容の見をとりしを以て、喇嘛教の外道教、回回教、基督教も亦行れたり。當時道教は分れて正一教、眞大道教、太乙教の三となり、基督教は法王インノケント四世のプラノカルピニを遣して拔都汗を諭さしめたるあり、ルブルクの和林に赴きて蒙哥汗に謁するあり(一二五三年)、又モントユルピノの布教に盡力して多數の信者を得たるありき。以上は皆フランチスコ派の僧侶なりとす。

第四節 火薬の發明は遠く支那古代にありしと雖も、之を銃砲に應用したるは蒙古軍の一二三二年汴京包圍の際を以て始とすべく、又文永の元寇には蒙古兵鐵砲を飛ばして我軍と管崎に戦ひき。

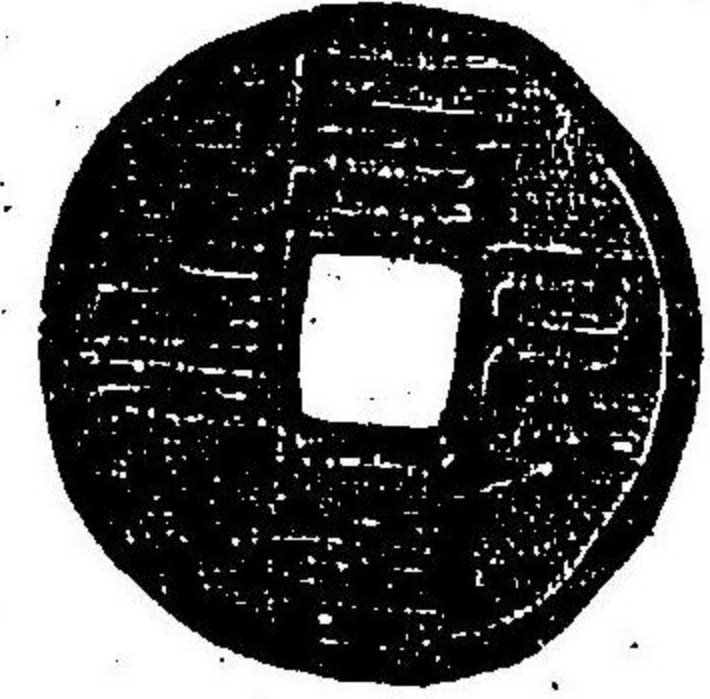
火薬

第三第四
第九第十
四地圖卷
元の衰運

第五章 明の興起と帖木兒の雄圖

第一節 成宗の崩後(一三〇七年)元の歴史は帝位の篡奪、權臣の專

態、財政の紊亂及喇嘛僧侶の跋扈とに過ぎず。斯の如きと三十年にし
て民心愈々元室を離れ、貴州廣西の猺苗の亂を作せるを始として群雄
各地に蜂起し、方國珍は台州浙江台州府に據り、韓山童は欒城直隸正定府欒城縣に起り、
劉福通と合して河南の諸州府を攻略し、李二是徐州江蘇徐州府に據り、徐壽
輝は湖北江西を略して國を天完と號し、張士誠は高郵江蘇高郵州に據り、
て國を吳と稱せり。元の丞相脱々は順宗帝妥歡帖睦が、讒によりて斥けられ、哈麻代りて丞相となれり。已
にして劉福通は韓林兒を奉じて國を宋と號し、汴京
を陥れて此に都し、天完の將陳友諒は其主徐壽輝を殺し、漢陽に都し



至元通寶
元順宗元年所鑄

欠

MISSING

アングラに迎撃し、大敗して其擒となれり(一四〇二年)。尋で帖木兒は明を襲はんと欲して東征の途に上り、シール河を渡りて疾を獲、遂にオトラルに歿しぬ。時に一四〇五年にて明の成祖の永樂三年に當れり。

第六章 永樂の盛時

第一節 明の太祖は即位以來深く意を内治に用ゐ、丞相の専恣を防がんが爲に吏、戸、禮、兵、刑、工六部の尙書をして政務を分掌せしめ、地方には布政使、按察使を置き、知府、知州、知縣を其下に隸屬せしめ、租税を輕減し、學校を設け、程朱の學說を以て教育の本旨とし、科擧の法を再興し、律令を改削して大明律を制定し、又封建の制を布きて諸王二十四人を分封したるも、領土を與へずして單に俸祿を賜ひ、護衛を附するのみなりき。然れども邊境守禦の任に當れる諸王殊に燕王棣の

永樂の變



明太祖元璋



馬皇后

如きは、地大に權重くして、隱然明室に抗し、加ふるに太祖の前後二大疑獄を起して、功臣宿將を誅除するありしかば、遂に永樂の禍を醸すに至りぬ。

第二節 太祖崩じて太孫惠帝允炆立ち、漢の七國を削平せし例に倣ひて、着々諸藩王の地を削るや、燕王棣は自ら安んずる能はずして、靖難の兵を起し、互に勝敗ありき。已にして燕王は宦者の内應によりて京師の空虚なるを知り、大舉して之を陥れ、自ら帝位に上りて永樂と改元せり。是を成祖帝と爲す(一四〇三年)。方孝孺以下節に死する者頗る多し。成祖即位以來諸侯の地位を復し、州縣の租税を減免し、刑罰の施用を嚴にし、又儒學を獎勵する等、諸政多く太祖の遺

韃靼と瓦剌

謀を襲げり。大學士の漸く機務に參し、他日宰相の實を有するに至りしは此頃より始めり。

第三節 元の遺族は尙和林に據りて明の境上に寇せしが、順宗の子脱古思帖木兒の歿後弒逆相次ぎて國勢衰へ、一三九九年鬼力赤篡立して國を韃靼と號し、又可汗と稱せり。已にして其臣阿魯台之を殺して元の皇族本雅失里を迎へ、明使を殺して其招諭に應ぜざりしかば、成祖親ら大軍を率ゐて來り攻め、本雅失里を幹難河上に破りぬ。時に蒙古の瓦剌部勢漸く強く、本雅失里を殺し、又明に通じて阿魯台を除かんとせしかば、阿魯台は却て明に内附して瓦剌を撃たんとを請へり。然れども幾もなくして復背き、瓦剌兀良哈(黑龍江の南)と同じく邊境に入寇し、成祖は都を北京に徙して屢之を親征せり。

第四節 安南は陳烜の子陳翥の時名臣輩出して朝野文華を競ひしが、二傳して陳暉に至り、漢王陳友諒と結びて朱元璋と相攻め、又占

安南の征定

城を伐ちて克たざりき。其後占城數來寇して安南大に衰へ、黎季犛遂に陳氏を篡して國を大虞と號し(一四〇一年)本姓に復して胡氏と稱し、尋で位を子漢倉に傳へたり。因て明の成祖は陳氏の遺族を援くるを名とし、大兵を發して安南を伐ち、胡季犛父子を擒にし、交趾布政使を置きて之を治めしめたり。

黎利

かく明は陳氏の後を立てざるのみか、其施政多く苛酷なりしを以て騷亂また起り、清華の人黎利は兵を擧げて(一四一八年)連に明軍を撃退し、遂に陳氏の後を奉じて外藩たらんとを請へり。時に明は成祖の孫宣宗瞻基位にあり、止むを得ずして安南の請を納れたりしが、其後久しからずして黎利篡立し、大越皇帝と稱して都を交都東京に徙しぬ(一四二八年)。

朝鮮の創立

第五節 高麗は忠烈王以後國王の廢立より官名廟號等に至るまで諸事悉く元の干涉を被りしが、十四世紀の半頃恭愍王顚立つに至

り、始て元の羈絆を脱しぬ。然れども當時外は倭寇及紅頭賊劉福通の軍の來侵するあり、内は武臣の功を恃み權を爭ふありて國威振はざりき。尋で明起るに及び、一旦其正朔を奉じたりしが、恭愍王より四傳して辛禡に至り、元と通じて明を攻めんとし、崔瑩李成桂をして兵を率ゐて遼東を攻めしめたり。然るに李成桂は途に變心し、崔瑩を高峯縣京畿道に流し、辛禡を江華島に遷して其子辛昌を立て、復之を廢して恭讓王瑤を立て、遂に其禪を受け、使を明に遣りて國號及封冊を受けたり。是を朝鮮の太祖康獻王と爲す(一三九二年)。以後朝鮮は歷世明に朝貢して深く恭順を表しき。

倭寇

第六節 忽必烈の東征後日本と元との貿易は、唯商船僧徒の私に通ずるのみなりしが、元末明初に至り我西陲の船舶の支那朝鮮の沿海を剽掠するもの多く、張士誠方國珍の餘黨も亦之に加れり。是を倭寇と云ふ。高麗の恭愍王、辛禡及明の太祖は屢使を我國に派して沿邊

足利義滿

の侵略を禁ぜられんとを請ひしも其効なく、太祖は沿海各地に防倭衛所を設けて之に備へたり。既にして將軍足利義滿は使を明に遣り、成祖の封を受けて日本國王となり。鎮西に令して海賊の明を侵す者を捕へしめ、又諸國守護に命じ、商賈に勸めて明との貿易を行はしめぬ。凡そ我國の支那と大に交通するもの前後二回、前には唐と通じて其制度文物を摸倣し、後には明と通じて其工藝美術を移植せり。我國工藝美術の足利氏に至りて俄に前代に超絶するに至りしは職として是に由れり。

第七章 外患の頻繁

第一節 瓦剌部は脱懼出づるに及びて益勢を増し、阿魯台を攻殺して元の宗室脱不花を立て、陽に之を推奉しき。脱懼死して也先繼ぎ、哈密を攻めて其王を擒にし、兀良哈を破りて朝鮮を脅し、一四四九年

第十五節
十四地圖
參照
瓦剌の強盛

宦官の専恣

年大舉して明を侵し、宣宗の子英宗帝祁鎮を土木直隸宣化府懷來縣の西南に擒にし、進みて京師に逼りしかど、景帝祁鈺能く防ぎ、抜くと能はずして北に還れり。其後也先は屢、邊境に寇せしと雖も、毎に明將の爲に撃退せられ、遂に英宗上皇を返還して之と和を結び、又脱不花を弒じ、自立して田盛可汗となれり。尋で也先は部下阿剌の爲に殺され、一四五四年、阿剌はまた韃靼部の主孛來の爲に殺され、脱不花の子麻兒可兒立ちて小王子と號しき。此間明は景帝崩じて英宗重祚し、英宗崩じて子憲宗帝見深嗣げり(一四六五年)。

第二節 初め明の太祖は宦官の政事に與るを禁じたりしかば、宦者等之を含み、永樂の變に際し、却て燕王を助け、是より漸く勢を振ふを得たり。十六世紀の初、武宗帝厚照立つに及び、宦者劉瑾事を用ゐ、正士を斥逐して頗る朝政を紊亂せしかば、諸藩王の劉瑾を誅するを名として兵を擧ぐる者多く、盜賊各地に蜂起して州郡益多事なりき。王

韃靼の侵寇

守仁能く兵を用ゐ、悉く之を一掃せしと雖も、武宗崩じて従弟世宗帝厚熄嗣立するに至り(一五二二年)方士を信じ、佛に倣し、日に齋醮を事として政を顧みず、宦者嚴嵩之に乗じて大に威柄を弄し、國政また紊亂せり。

第三節

韃靼は亭來以後勢炎再び揚り、小王子ト赤は賀蘭山に據り、青海、烏斯藏を併せ、又屢明の北境に寇したりしが、後稍兵を厭ひ、東方に移りて土蠻と稱しぬ(一五三二年)。是に於て其族俺答之に代り、或は河套に據りて山西の各地を侵し、或は古北口より入りて北京附近を掠め、世宗は之と馬市を通じたるも猶其侵寇を止むる能はず、次帝穆宗載屋の張居正を用ゐて紀綱稍張るに及び、始て之を服するを得たり。

第四節

緬甸はタリク、ビエーメンの歿後、東方の掌人起りて勢を張りしが、久しからずして衰へ、毘牛のタウング家之に代れり。十六

緬甸の形勢

安南二分す

世紀の初タウング家強盛を極め、阿瓦、阿臘干を併せ、東は欸を大越に通じ、東北は明と相應じて邊境の諸土司を征しき。

大越は黎利より四傳して黎灝に至り、内は民治を力め、外は版圖を擴め、南は占城を滅し(一四六六年)、北は雲南を侵し、西は哀牢の大半をとり、又緬甸を服し、爲に中興の聖主と稱せられたり。然れども其後庸主暴君相繼ぎて國威衰微し、莫登庸機に乗じて政權を握り、國王黎椅を逐ひて其弟を立て、又之を廢して自ら王位に即き(一五二八年)、尋で位を子登瀛に譲れり。是より先き清華の人阮徐は走りて哀牢に在りしが、黎椅の子黎寧を奉じて主とし、清華に據りて登瀛と相攻め、又使を明に遣りて莫氏篡立の情を訴へたり。因て世宗は師を出して將に莫氏の罪を問はんとせしが、登庸の罪を謝して内藩たらんとを請ひしにより、其孫福源を以て安南都統使とせり(一五四〇年)。是に於てか國內二分し、莫氏は北部を有して南部の黎氏と相争ひぬ。

日明の交
通

第五節 日本は足利義持の時明と絶ち、又蒙古、朝鮮、南蠻の賊船千三百艘の對馬に寇せるを撃退せしが、義教將軍たるに及び、復使を遣りて明に聘し、時の明帝宣宗は報聘使を送り、封爵を授け、倭寇の禁絶を請ひ、信符二百枚を給して勘合となせり。因て幕府は從來朝鮮の交通を管せる大内氏に勘合符を托して其受付を掌らしめ、爾後大内氏は明貿易を管掌し、朝鮮貿易は宗氏之を管掌するとなれり。當時彼我貿易の利頗る多く、大内、少貳、島津諸氏は皆外國貿易の津港に據りて富強を致しぬ。義時將軍の初年幕府の遣明使の大内氏の遣明使と彼地に於て相争ふ事ありしが爲、明の交通一旦破れしも、十餘年の後大内義隆之を復し、併せて朝鮮の好を修めたり。時に明は世宗位に在り、應仁以來猖獗を極めたる倭寇を防ぎ、僅に之を平ぐるを得しと雖も、其殘黨は東蕃（馬山云ふ）即ち臺灣を占領して猶時に明を侵したりき。

第二期 歐人の東漸より清の衰運まで

（紀元一五一七年—同一七九六年）

第一章 歐人の東漸

第一節 印度は一四一四年ツングラック朝滅亡し、サイド、ロヂーの兩朝相次ぎて之に代りしが、共に僅にデルヒ近傍を領有せるに過ぎざりき。又中央亞細亞は十五世紀以來月祖伯人の侵入するありて紛亂を極めしが、帖木兒五世の孫なるフルガナ王バベルに至り、撒馬兒罕カプールを略し、更に南下して北印度に入り、ロヂー朝を殪して莫臥兒帝國を建てたり（一五二六年）。子フマユンの時國內各地に叛亂起り、フマユンは傍葛刺汗に逐れて一旦波斯に走りしが、次で其援兵を得て莫臥兒朝を恢復しき（一五五五年）。

第二節 フマユン崩じて子アクパール嗣ぐに及び、連年兵を用ゐ

第十四節
一第九地
圖參照
莫臥兒朝

アクパール

て境域の擴張に従事し、其勢威北は格失迷、カプールより南はギンヂ
 ア山脈を踰えてカンデス、ベラールに至り、東は榜葛刺、アッサムより西
 は亞拉比亞海に達せり。帝また意を内治に注ぎ、財政、司法、軍備を整頓
 し、文學を獎勵し、宗教に對しては極めて寛裕なる意見を抱き、臥亞よ
 り葡萄牙の加特力傳教師を招きて基督教を學び、印度回々兩教徒に
 政治上の同權を與へたり。

葡萄牙人の東侵

第三節 十四世紀の末より十五世紀の初に亘り、歐洲諸國の形勢
 一變し、各國競ふて新陸地の發見拓殖に従事せり。殊に印度の豊富は
 夙に歐洲に知られしを以て、印度に達するの航路を發見せんと欲し
 たる者其數少からざりしが、ヴァスコ・ダ・ガマ遂に其目的を達し、一四九
 八年を以てマラバール海岸のカリカットに到着しぬ。是より葡萄牙人
 は續々として印度に來り、臥亞を略取して(一五一〇年)宗教及商業の
 根據地となし、漸次印度の東海岸及錫蘭に商館を開き、更に東進して

ハギエー

滿刺加瓜哇を侵し、支那海に入り(一五一七年)數年にして廣州、厦門、
 寧波の各地に商館を建てしが、其阿媽港を占領して後は専ら此地
 にて貿易を行へり。而して我日本との交通は一五四一年葡萄牙商船
 の大隅種子島に來りしを以て發端とすべし。

葡萄牙人の拓地殖民貿易は必ず宗教と伴ひたりしが、一五四二年
 ジュスイト派の宣教師フランシスコ・デ・ハギエーの臥亞に來りしより
 加特力教の傳道隆盛となり、ハギエーは遂に我鹿兒島に來り(一五四
 九年)平戸、京師、周防、山口の各地に布教し、一旦臥亞に歸りし後支那に
 航して彼地に歿しぬ(一五五二年)。

西班牙人

第四節 時に西班牙も亦東洋貿易の利を得んと欲し、デレガスピ
 ーを派してフリピン群島を占領せしめ、一五七一年マニラを建て、進
 みて支那と通商を開かんとせしも、葡人の爲に妨げられ、次で我平戸
 港に來航せり(一五八〇年)。



「ビスガレ、テ、ペロ、ル、イ、グミ」

を以て根據となし、西は印度のヌーラートに商館を作り、バリカットに城塞を築き、北東平戸に來航し（一五九七年）、支那海に入り、葡人の妨害に遇ふて臺灣に據れり（一六二四年）。

第五節 英吉利人は一五七九年始て印度に達せしも、未だ貿易を營むに至らざりしが、東印度商會の設立以來（一六〇〇年）、漸次歩を進

和蘭人の東方經略は其商船の蘇門答刺、バンタムに達せしを以て嚆矢とす（一五九六年）。次で和蘭東印度商會成り、幾多の艦船を東洋に派し、到る處葡西の殖民地及商船を掠め、勃泥及其附近の諸島を占領し、瓜哇のバタヴィア府

欠

MISSING

全性理大全を編纂せしめて之を大小學校に配附せり。而して科擧經義は一に程朱の説に據り、薛瑄字叔謙以來其說益行れしが、王守仁字伯安



王守仁

出づるに及び、學術始て分れ、瑄を宗とせる河東派と、守仁を宗とせる姚江派とは、各門戸を立て、相争ひぬ。守仁の説は陸象山に基き、格物致知は之を心に求むべく、之を事物に求むべからずとせり。此派を一に王學と云ふ。後顧憲成の學を東林に講ずるに及び、門戸の争益甚しく、遂に黨議を爲して傾軋するに至りき。

第二節 明初詩文大に起り、宋濂方孝孺は文を以て、高啓袁凱は詩を以て名ありき。十五世紀の末より十六世紀の初に亘り、李攀龍字子潛王世貞字伯敬の徒出で、復古を唱導し、文は秦漢に、詩は初唐に法るべしと説き、談藝の士翕然之を宗とせしが、明末歸有光陳子龍出づるに及び、力めて李王の説を排し、文壇復一變せり。史學には宋濂等が編修

全性理大全を編纂せしめて之を大小學校に配附せり。而して科舉經義は一に程朱の説に據り、薛瑄字德温以來其說益行れしが、王守仁字伯安



王守仁

出づるに及び、學術始て分れ、瑄を宗とせる河東派と、守仁を宗とせる姚江派とは、各門戸を立て、相争ひぬ。守仁の説は陸象山に基き、格物致知は之を心に求むべく、之を事物に求むべからずとせり。此派を一に王學と云ふ。後顧憲成の學を東林に講ずるに及び、門戸の争益甚しく、遂に黨議を爲して傾軋するに至りき。

第二節 明初詩文大に起り、宋濂方孝孺は文を以て、高啓袁凱は詩

を以て名ありき。十五世紀の末より十六世紀の初に亘り、李攀龍字子興王世貞字美伯の徒出で、復古を唱導し、文は秦漢に、詩は初唐に法るべしと説き、談藝の士翕然之を宗とせしが、明末歸有光陳子龍出づるに及び、力めて李王の説を排し、文壇復一變せり。史學には宋濂等が編修

全性理大全を編纂せしめて之を大小學校に配附せり。而して科舉經義は一に程朱の説に據り、薛瑄字温以來其說益行れしが、王守仁字伯安



王守仁

出づるに及び、學術始て分れ、瑄を宗とせる河東派と、守仁を宗とせる姚江派とは、各門戸を立て、相争ひぬ。守仁の説は陸象山に基き、格物致知は之を心に求むべく、之を事物に求むべからずとせり。此派を一に王學と云ふ。後顧憲成の學を東林に講ずるに及び、門戸の争益甚しく、遂に黨議を爲して傾軋するに至りき。

第二節 明初詩文大に起り、宋濂方孝孺は文を以て、高啓袁凱は詩を以て名ありき。十五世紀の末より十六世紀の初に亘り、李攀龍字子敬王世貞字伯敬の徒出で、復古を唱導し、文は秦漢に、詩は初唐に法るべしと説き、談藝の士翕然之を宗とせしが、明末歸有光陳子龍出づるに及び、方めて李王の説を排し、文壇復一變せり。史學には宋濂等が編修

喇嘛教

せる元史ありと雖も、蒼卒に成りしを以て脱漏の譏あり。戯曲小説も亦頗る盛にして西遊記金瓶梅等の好著あり。畫家には仇英沈周あり、文徵明は書畫共に秀でたり。

第三節 喇嘛教は明の中葉宗喀巴新義を唱へてより分れて二となり、八思巴の開きたるを紅教と云ひて其徒は紅衣を着し、宗喀巴の創めしを黃教と云ひて其徒は黃衣を着したり。是より紅教は痛く衰へしが、宗喀巴死するに及び、弟子達賴喇嘛及班禪喇嘛は各其統を繼承し、達賴は前藏に居り、班禪は後藏に居り、世、化身轉生を以て教を傳ふるものとせり。



ルヤジ、ムダア、ンハヨ

基督教はジスイト派のミゲルルデーロー一五七九年を以て澳門に來り、マテオリッチー漢名 利瑪竇は尋で廣東肇慶府に來り、一六〇一年遂に燕京に達し、深く神宗の信任を得たり。爾來フーベル、

基督教



トス、ビル、エフ、ドンナゲル、エフ

マルチニ、アダム、シヤル漢名 湯若望フルピースト等の諸僧續々として支那内地に傳道し、大學士徐光啓の如き有名なる信者をも得しが、次でフランチェスコ派とドミンゴ派との間に激烈なる宗教上の争を生じ、僅に廣州に於けるジスイト、フラン

科學

チエスコ、ドミンゴ三派の宗教會議に於て解くるを得たり。
第四節 是等傳教師の手により地理學天文學は頗る發達し、アレ漢名 艾如略の職方外紀、リッチー漢名 利瑪竇の萬國全圖、サバチヌス漢名 熊三拔の泰西水法、エマニエル、デアツ漢名 陽瑪若の天問略等の如き著あり。莊烈の代に成りし崇禎曆書はヤコブ・ロー漢名 羅雅谷アダム・シヤル等が西洋曆によりて編述せしものなり。又本草學は明に至りて頗る進歩し、李時珍三十餘年を費し、八百餘家を講究して一大著述をなせり。本草綱目即ち是なり。



朝鮮の服
従

大清太祖皇帝爾哈赤

奉天府に於ける太宗皇帝廟

第四章 清の一統

第一節 一六二六年後金は奴爾

哈赤殂して太宗太宗帝皇太極立ち、
西は元の後裔挿漢即ち察哈爾部を
滅し、南は明軍を大凌河に破りて錦
州を取り、國號を改めて大清と云ひ
(一六三六年)又朝鮮を攻めて之を下
しぬ

第二節 是より先き朝鮮王光海

君瑋宣祖の子は奴爾哈赤の明を侵すに
際し、兵を出して明を援けしめしが、
其將姜弘立の後金に降るに及び、已
むを得ずして和を請ひ、約して兄弟

世祖帝

明室の末
日

の國となれり。然るに朝鮮は國初以來明との關係厚かりしを以て尙
密に明に通ぜしかば、次王仁祖倂の代清軍の來討を被ると前後二回
に及び、第二回即ち一六三六年には太宗自ら十萬の大軍を率ゐて來
り攻め、京城を陥れて仁祖を降しぬ。以後朝鮮は清の正朔を奉じて世
屬國の禮を取れり。

第三節 太宗崩じて世宗帝福臨嗣立するに及び、叔父睿親王多爾
袞をして明を伐たしめ、降將吳三桂の軍を併せて、大に李自成の軍を
山海關に破り、長驅して北京に入れり(一六四四年)。かくて世宗は都を
北京に徙し、更に山西陝西を定めて李自成を湖廣に逐へり。

第四節 莊烈崩ずるや、兄福王由崧は南京に據り、史可法をして中
原の恢復を圖らしめたり、因て清軍は南下して史可法を揚州に殺し、
江を渡りて南京を陥れ、福王を蕪湖に擒にし、嚴に剃髮の令を布けり
(一六四六年)。是に於てか唐王聿鍵は帝位に上りて福州に都し、魯王以

海は紹興にありて監國と稱し、江蘇江西之に響應しき。已にして世祖は諸軍を發し、張獻忠を平げて四川を取り、江蘇江西を鎮定し、又李自成を平げて湖廣を略し、更に浙江に入りて魯王を海上に逐ひ、福建に入りて唐王を汀州に擒にしぬ。然るに明の遺臣は更に屈する色なく、桂王由榔を肇慶に立て、唐王聿錡を廣州に立てしが、二王内に聞きて外清軍を防ぐ能はず、唐王は執へられ、桂王は南寧に走りて一旦其勢を復したりしが、また破れて雲南に奔り、緬甸に入り、緬甸王に執へられて遂に清營に送られたり。

鄭成功

第五節

是より先き魯王は舟山島に據りしが、清軍に破られて厦門に走り、鄭成功に依れり。成功は父を芝龍と云ひ、母は日本平戸の人なり。曾て兵を起して福建の各地を下したりしが、魯王の來り投ずるに及び、軍氣大に振ひ、使を日本に派して時の將軍徳川家綱に援兵を求め、又鎮江南京を陥れたり。然れども日本は援兵を謝絶し、清軍は鎮

三藩の亂

江南京を恢復し、進みて明軍を撃破せしかば、成功は魯王を奉じて臺灣に據りぬ。因て和蘭人は清軍と合して鄭氏の軍を破りたれども、遂に臺灣を恢復する能はず、貿易は廣州にて之を營むとせり。幾もなくして魯王成功相次で歿せしと雖も、一六六二年、成功の子鄭經は猶臺灣に據りて明の正朔を奉じき。

第六節

一六六一年世祖崩じて聖祖帝立、暉立ち康熙と改元せり。故に是を康熙帝とも云ふ。時に明の降將吳三桂は平西^西に、耿精忠は靖南^南に、尙可喜は平南^南に封ぜられ、各、大兵を擁し、勢威頗る強大なりき。已にして尙可喜の老病の故を以て藩籍を奉還せんと請ふや、聖祖は容易に之を許容せしかば、吳三桂耿精忠二人は共に自ら安ずる能はず、三桂先づ叛して、一六七三年、四川、貴州、湖南の各地を侵掠し、精忠も亦兵を擧げて臺灣の鄭經と連和し、尙可喜の子之信も亦父を幽して遙に三桂に通ぜり。是に於てか江南一帶悉く賊の有に歸し、清軍

南下する能はず、三桂勢に乗じて兵を二道に分ち、一は長沙より江西に入りて耿精忠と合し、一は四川より陝西に入りて提督王輔臣を降しぬ。然れども是より賊勢漸く衰へ鄭經は精忠と隙を生じて却て相攻め精忠之信、輔臣等は相前後にして清に降り、三桂は帝位に上りて衡州に都せしも久しからずして病死し、孫世璠立ちて貴陽に據りしが、敗れて雲南府に奔り、勢究りて遂に自殺せり（一六八一年）。次で水師提督施琅は澎湖を征定して臺灣に進み、鄭經の子克塽は衆寡敵すべからざるを知りて降を請ひ、臺灣全く清の版圖に歸するに至れり（一六八三年）。

徳川初代の外交

第七節 日本は徳川家康政權を執るに及び、また朝鮮に通じ、朝鮮は是より將軍繼代の際、必ず我國に來りて好を修めたり。而して明は竟に我と絶ちしも、南京、福建、廣東の商賈は久しく貿易の利を占め、來航するもの年々絶えざりき。一六〇〇年和蘭の商船堺浦に來りしよ

り、呂宋、英吉利、安南、東瀟塞、占城等諸國の船舶續々として來航し、我商人も亦幕府の印券を乞ひ、船舶を發して海外に貿易する者多く、或は遠く亞米利加に航するに至れり。時人之を御朱印船と稱す。又程朱の説は我僧徒の明に往來せし者より傳りて頗る我國思想界に影響する所ありき。

基督教の禁

葡萄牙の商舶の我鎖西に貿易を開きてより、大友島津、有馬、大村の諸侯は皆便要の港を開きて外船を招來し、基督教隨て流行し、諸侯の之に歸依する者多く、其貿易布教の中心は平戸を去りて長崎に移りぬ。基督教は豊臣氏の時已に禁せられしが、徳川氏に至りて益之を嚴禁し、將軍家光の如きは或は人民の海外航通を禁じ、或は和蘭明の外總て海外諸國の來航を謝絶し、僅に長崎一港を以て貿易場とする等、百方基督教の傳播を防ぎ、自ら鎖國主義に陥れり。是より蘭人獨り東洋貿易の利を壟斷し、葡人を攻撃して滿刺加、蘇門答刺、錫蘭等を奪ひ

ぬ。

第十五第八地圖參照

尼布楚條約

第五章 清威の擴張上

第一節 三藩の亂後世祖は力を北邊に用ゐて愛琿城を築き使を雅克薩に遣りて露人に退去を諭し其應ぜざるや兵を出して之を拔



清聖祖皇帝

き守將トボルジンを尼布楚に逐へり。然るにトボルジンは清軍の退去するに乘じ再び雅克薩に入りしかば、聖祖は復大兵を派して之を圍み露西亞女帝ソフアのゴロー井ンを使者として兩國境界を畫定せんと請ふに及び漸く令して其圍を解

かしめぬ。是に於て内大臣索額圖は尼布楚に於てゴロー井ンと商議し、スタノヂイ山脈、格爾必齊河、アルグン河を以て兩國の境界とし、露人は雅克薩を毀ちて退去すべしとせり。是を尼布楚の條約と云ふ。一六八九年。此條約は露國にとりて頗る不利なりしかば、ピートル大帝は常に其改正を欲したるも、本國內政の整頓に汲々たりしを以て、之を改むる能はざりき。

噶爾丹

第二節 内蒙古の察哈爾、土默特、鄂爾多斯の諸部は太宗の時既に清に降りしが、喀爾喀即ち外蒙古は元の後裔なる土謝圖汗、車臣汗、札薩克圖汗之を分領し、又漠西には厄魯特、回疆の四部、準噶爾、都爾伯特、土爾扈特、和碩特、相并立して猶清に降らざりき。噶爾丹、準噶爾王となるに及び、他の三部を併せ、また回部、南天山の亂に乗じて之を略し、更に喀爾喀を侵せしかば、其三汗は奔りて清に投せり。一六八八年。因て聖祖は噶爾丹に諭してその侵地を返還せしめんとせしに、噶爾丹敢て

命を聽かず、進みて内蒙古を侵しければ、帝は兵を遣して烏蘭布通に克ち、和を許して振旅せり（一六九〇年）。已にして噶爾丹は達賴喇嘛と隙を生じ、其頼むべからざるを見るや、當時中央亞細亞より伊犁地方に至るまで一帯に蔓延せる回々教徒の勢援を假りて清と争はんと欲し、自ら回々教を奉じ、大舉して喀爾喀に入り。是に於てか聖祖は十五萬の大軍を發し、費揚古をして第一軍に將たらしめ、薩布素をして第三軍に將たらしめ、自ら中軍に將とし、噶爾丹が本據なる科布多に向て進み、大に敵兵を昭莫多に破りぬ。時に噶爾丹は外征日久しく、故地準噶爾は姪策妄阿拉布坦の併す所となり、回部青海も亦皆離畔して身を寄するに所なく、遂



滿州將軍兵

に自ら毒を仰ぎて死し、阿爾泰山以東の地は悉く清の版圖に歸しぬ（一六九七年）。

定 西藏の鎮

第三節 かくて策妄拉布坦は厄魯特四部の長となりて密に清に敵意を懷き、先づキルギス族を征して之と和し、次で西藏を得んと欲して好機の至るを待てり。是より先き西藏は黃教獨り勢を擅にして紅教をブータンに逐ひ、達賴喇嘛は一國の主權を握りしが、桑結なる者諸政を專にするに及び、其臣拉藏汗之を殺して自ら政をなせり。是に於てか策妄拉布坦は拉藏汗を征するを名として兵を出し、容易に拉薩を陥れ、又一隊の軍を遣りて西寧府を襲はしめたり。然れども清軍來討して容易に之を逐ひ、更に達賴喇嘛を封じ、兵を駐めて西藏を守らしめき（一七二〇年）。

定 青海の征

第四節 一七二二年聖祖崩じて世宗胤禛繼ぐや、青海の汗羅卜藏丹津叛して西寧を侵し、勢一時盛なりしが、其後敗れて準噶爾に投ず

るに及び、策妄拉布坦は之を蔽護して清廷に交付せざりき。已にして拉布坦死して(一七二七年)噶爾丹策零嗣ぎ、連に清の西境を侵し、清軍と戦ひて互に勝敗あり。遂に一七三五年を以て和を結び、大阿爾泰山脈を以て境界とし、伊犁の遊牧は界東を過ぐるを得ず、喀爾喀の遊牧も亦界西を過ぐるを得ずとせり。

第六章 清威の擴張下

第一節 一七三六年清は世宗の子高宗弘曆位に即きて乾隆と改元せり。乾隆十年噶爾丹策零死し、其二子相次ぎて位に上りしも、國內平かならず、策零の孫達瓦齊其族阿睦撒納の援を得て嗣立せしが、次で之と隙を生じ、阿睦撒納は所部を率ゐて清に降り、具に準噶爾の取るべきを奏せり。是に於て高宗大に喜び、班第を定北將軍とし、阿睦撒納と共に北路より烏里雅蘇臺に出でしめ、永常を定西將軍とし、西路

第十五第八
第九地
圖參照
準噶爾の
討平

より巴里坤に出でしめ、達瓦齊を烏什に逐へり。烏什の酋捕へて之を



高宗弘曆

清に獻じ、準噶爾一時平定に歸せしと雖も、阿睦撒納また叛旗を翻して班第等を殺し、かば、高宗は兆惠成良札布の二將をして之を伐たしめたり。時に準噶爾諸部相和せず、且つ痘疫流行して死亡相望みしかば、清軍の向ふ所潰散せざるはなく、阿睦撒納は露西亞境内に入りて死し、準噶爾遂に平定に歸しぬ(一七五七年)。

回部の征
定

第二節 喀什噶爾汗の子布羅尼特及霍集占は曾て準噶爾に虜にせられしが、清軍の之を征するに當り、其援を得て舊領を恢復するを得たり。然るに阿睦撒納の叛するや、霍集占は伊犁にありて之に應じ、準噶爾平定後は喀什噶爾に還り、兄布羅尼特に勸むるに獨立の計を以てし、連に清軍に克ちて庫車に據れり。已にして庫車陥り、布羅尼特

緬甸征伐

は喀什噶爾に奔り、霍集占は葉爾羌ヤルカンに奔り、東西相應じて勢猶盛なりしが、清將兆惠の烏什より喀什噶爾に、富徳の和闐より葉爾羌に進むに及び、布羅尼特兄弟は城を棄て、葱嶺を踰えて巴達克山バダクに遁れ、遂に其酋長の爲に擒殺せられ（一七六二年）、回部全く平定せり。

第三節 清初毘牛は和蘭人の援を假り、阿瓦を撃ちて全く其地を併せしが、阿瓦は木疏ムスのアロムバラト出で、王となるに及び、再び毘牛を併せ、更に暹羅と戦ひて大に之に克てり。二傳してゼムブンに至り、清と隙を生じ、高宗は明瑞をして之を伐たしめしも利あらざ（一七六八年）、更に傅桓をして之を伐たしめ、遂に其利を許せり。已にして金沙江上流の苗越種の亂を作して、數清軍を撃破するありしが、阿桂の來り討ずるに及び、叛魁索諾木力屈して出で降りぬ（一七七五年）。

暹羅清に通ず

第四節 暹羅は十七世紀の初ブラチーソンナム位に即き、日本人山田長政を用ゐて逸比留侯となし、日本に通じ、又六昆、阿瓦、呂宋に克

安南清に通ず

ちて國威大に振へり。然れどもブラチーソンナムの王位を篡するに及び、長政其毒手に斃れ、日暹兩國の通商も亦絶えたり。此後暹羅は外は毘牛、阿瓦、廣南と戦ひ、内訌また數起り、遂に一旦全く阿瓦王の爲に討滅せられしが、鄭昭即ちフジャック起りて敵兵を卻け、都を盤谷バンコクに定め、次王ブラチーランに至りて中國に貢し、高宗の封を受け、暹羅國王となれり（一七八二年）。

第五節 十六世紀の末大越の黎氏は莫氏を滅して一統の業を成すを得たりしが、宰相鄭氏世政を專にし、王はたゞ虚名を有するに過ぎざりき。一六〇〇年廣南の阮潢自立して王となり、都を順化府に定むるに及び、安南復兩分し、阮氏は黎氏と相對立し、又毎に圖南の策を畫して占城甘蒲塞と兵を交へたりしが、一七七五年阮潢の統亡び、阮文岳順化府を陥れ自立して交趾王となり、弟阮文惠をして北伐せしめたり。文惠兵を率ゐて交都に入り、宰相鄭氏を滅し、黎維祁を擁立し、

廓爾喀征伐

尋で建立して東京王となりしかば、維那は救を清に請へり。高宗因て兵を遣じて之を征せしめしも、戦概ね利あらず、文惠の和を請ふに及びて乃ち之を許しぬ。

第六節 喜馬拉耶山脈の南北に住せる人民は古來衝突すると少かりしが、一七六九年廓爾喀人の捏巴爾に雄を稱するに至り、漸く西藏又印度地方に掠奪を試みしかば、高宗は兵を派して大に之を破らしめ、北ぐるを追ふて將に捏巴爾の首府カトマンツに逼らんとせり。是に於てか廓爾喀人は大に恐れ、歳貢を納るべきを約して和を請へり(一七九二年)。

第七章 英領印度の建設

第一節 莫臥兒帝國はシャー・ジ・ハンの子オーラングゼブに至り、デカンのピジブール、ゴルコンダを滅したれども、マラータの勢は益強

第九第十
四地圖參
照
印度に於ける英佛の競争

く、且つ帝の回々教を尊信して印度教徒を虐遇せしより、其教徒の叛亂相次ぎて起り、帝の死後(一七〇七年)莫臥兒朝の權威は頓に地に墜ちぬ。之に反して英國東印度商會は、一六六八年孟買を建て、尋でカルカッタの基礎を置き、佛蘭西も亦

サイラトイバロ



スゲンチスヘンレロ



ポントゥシエリー、シヤンデルナゴールを建て、英國と競争し、本國戰あるや毎に此地に於て相戦へり。佛國はデブレイのポントゥシエリー總督となるに及び、土着諸侯の攻伐に加りて連に領土の擴張を圖りしが、英國は東印度商會の書記クライヴの佛人と通ぜるカーナチック侯を破り又ベンゴールの副王スラッジウドローラをブラッシーに破るに及び(一七五七年)其勢威遙に佛國の右に出でぬ。かくてクライヴは功を以て印度殖民地の總督に拜し、更に兵を出してポントゥシエリーを陥れ、又蘭領

波斯阿富汗斯坦の盛衰

チンスラーを略取しき。

第二節 十五世紀の末年波斯にはサフー朝起り、印度の莫臥兒朝と相對せしが、一七二二年に至り阿富汗人の爲に顛復せられ、ナチル・シャー次で波斯王となり、西は土耳其を破り東は阿富汗斯坦を征し、更に莫臥兒帝國を侵してデルヒを抄掠しき。然るにナチル・シャーの暗殺せらるゝに及び、其一將アーメド・シャー阿富汗斯坦に起り、ホラ、サン、カシミル、シンド、パンジブを併せ又マラータを破りしが、歿後其版圖は四分五裂し、阿富汗人の有する所は僅にカプール、カンダハール、ヘラト及阿富汗土耳其斯坦の四となれり。

第三節 是時に當り莫臥兒朝は僅に其餘喘を有てるに過ぎず。之に反して東印度商會は益々強盛に赴き、ベンゴール、オード及莫臥兒帝の聯合軍を破れり。一七七二年ヘスチングス代りて總督となるに及び、ベンゴール等の領土に於ける行政法を改革し、莫臥兒帝のマラー、

東印度商會の隆盛

タと通ぜるを名としてアラハバド及コラの地を奪ひ、之をオード副王に賣り、又ハイデラバド、マイソールの、マラータと結びてマドラスを攻撃せんとせるを征定せり。是に於てか英國政府は東印度商會を監督するの必要を知り、時の首相ピトは監督委員會を設けて大に商會の條例を改正せり(一七八四年)。

又英國は十七世紀の半頃より、臺灣及厦門に於て支那と貿易を行ひしが、一六八五年より廣東を以て貿易場と定め、盛に印度より阿片を輸入しぬ。

高隆帝

第四節 安南は阮文岳の自立するに際し前朝阮氏の裔なる阮福映は佛國宣教師ピニョーに援けられて暹羅に遁れしが、其後佛國の援を假りて漸く下交趾支那を定め(一七八八年)府を柴棍チクンに立て、又阮文惠の死後東京の騷擾せるに乗じ、北伐して東京を陥れ、都を順化に遷し、中興の業を清朝に申告し、國號を越南と改めぬ(一八〇二年)。是を

嘉隆帝と爲す。

第二期 清の衰運より今日まで

(紀元一七九六年—)

第一章 清の衰運

第一節 高宗の末年四川、陝西、湖北には白蓮教徒の亂を作すあり、貴州、湖南には諸苗の亂を作すあり、共に一旦鎮定に歸せしと雖も、仁宗帝永琰嗣立して嘉慶と改元するに及び(一七九六年)、白蓮教徒は再び湖北に起りて河南、四川、陝西、甘肅に蔓延し、騷擾七年にして辛ふじて平定するを得たり。然れども次で南山の守備兵の暴動するあり、海盜の閩、粵、臺灣近海を横行するあり、天里教ハルチ教徒の陰謀を企つる

第三第四
第十五第
一地圖參
照
内亂蜂起

あり、又浩罕汗ムハメドアリの貢賦を拒絶するありて清威漸く衰微に傾けり。

回部の叛

第二節 是より先き喀什噶爾汗の後裔張格爾は遁れて浩罕に倚りしが、仁宗崩じて宣宗帝綿寧立ち道光と改元するに及び、浩罕汗の援助を得て遂に喀什噶爾を陥れ、葉爾羌和闐等を下しぬ。是に於て陝甘總督楊遇春は大兵を發して喀什噶爾を復し、張格爾を虜にし、又浩罕と互市を絶てり(一八二八年)。然れどもムハメドアリの張格爾の兄玉素普を立てんとし、回部に侵入して止まざるより、再び互市を許し、回部の亂漸く平げり(一八三一年)。

鴉片戦争

第三節 英國の鴉片輸入額は年を追ふて増進しければ、宣宗深く其害毒を流すを憂ひ、廣東總督林則徐をして英商所有の鴉片を焼き、且つ其互市を禁ぜしめたり。是に於て英國政府は戰艦を派して互市を復せんことを強請したるも成らざりしを以て、更に戰艦を増派し、



喀什噶爾の圖

第四節 鴉片戰後清廷の威大に損じ、人民また帝室を重ぜず、兩廣

廣東、舟山、乍浦を陥れ、寧波を圍みぬ（一八四一年）。清廷琦善、伊里布を廣東に遣りて陽に和を求め、而して陰に大兵を集めて英軍を斥攘せんと計りしが、和未だ成らざるに戰端更に生じ、英軍再び廣東を取り、廈門を陥れ、定海、鎮海、寧波、乍浦、吳淞、鎮江を取り、將に南京に迫らんとせり。因て清廷は伊里布、耆英を南京に遣して英國全權公使が、チンヂーと和を議せしめ、償金二千一百万兩を出し、香港を讓與し、又廣東、福州、寧波、廈門、上海の五港を開くを約しぬ（一八四二年）。

の地には盜賊屢起れり。時に浩罕はムハメドアリー汗已に死してクダイヤー位に在り、兵を外邦と構ふるの勇無しと雖も、其諸酋長は喀什噶爾を襲はんとを望み、張格爾の七子に説きて兵を擧げしめ、喀什噶爾を圍みて其外郭を陥れたり。然れども遂に其内城を抜く能はず、却て逆撃を蒙りて國外に遁逃しき（一八四七年）。

長髮賊

第五節 廣東、廣西の地は基督教信徒殊に多し。一八四九年、廣東の人洪秀全、基督教を利用して兵を廣西潯州府附近に起し、連に廣西の各地を陥れ、國號を立て、太平天國と云ひ、自ら天王と稱しぬ。其徒皆髮を蓄ふるを以て世に稱して長髮賊と云ふ。時に宣宗崩じて文宗帝奕訢嗣ぎ咸豐と改元せり。諸將を派して賊を討せしめしむも、賊勢甚だ猖獗にして過ぐる所殘破せざるなく、長沙、岳州、武昌、漢陽皆陥り、秀全遂に南京に據りて制度律令を設け（一八五三年）、又兵を出して屢江北の各地を轉掠しき。但し刑部侍郎曾國藩の兵を湖南湘鄉に起して武

昌漢陽を復するに及び、官軍頗る振ひしが、賊將再び此地を奪ひて勢を張り、江岸の諸州は云ふに及ばず、安徽河南より直隸山西に至るまで皆其侵掠を被れり。已にして賊軍中に内訌起りしかば、湖北巡撫胡林翼は機に乗じて漢陽武昌を復し、曾國藩はまた江西の諸賊を平定しぬ。

文宗崩じて穆宗帝載淳嗣立し、同治と改元するに當り（一八六二年）、洪秀全猶南京に據りて兵を各地に出ししかば、帝は始て援を外人に求め、英米佛の三國は相議して其請求を容れ、米人華爾特、英人戈登、相次ぎて洋槍隊に將とし、毎戰奇功を奏しぬ。時に曾國藩、曾國荃、左宗棠、李鴻章の諸將も亦各郷勇を率ゐて各地を恢復し、遂に南京を陥れて秀全を滅し、十六年間の大亂始て平定に歸せり（一八六四年）。

第六節 清の五港を開きてより、各國居留民と清人との間には紛紜常に絶にざりしが、一八五六年廣東府吏の所謂英船アロー號不法

英佛同盟
軍の來寇

搜索事件を演ずるや、英國領事パークスは佛國を誘ひ、廣東の府城を焼き、天津に進みて媾和條約を結べり（一八五八年）。因て英佛二國の使臣は北京に赴きて條約の批准を交換せんとし、翌年進みて白河に至りしに、河口の砲臺より砲撃を被りしかば、戰端また開け、英佛二國の同盟艦隊は直に渤海灣を衝き、北塘太沽を陥れて天津に進み、遂に北京に入り、圓明園を燒棄しぬ。時に文宗は遁れて熱河に在り、恭親王を遣して和議を求めしめ、又露國公使イグナチエーフは其間にありて周旋し、清國は償金一千八百萬兩を出し、又牛莊、登州、臺灣、潮州、瓊州、九江、漢口を開くを約して漸く局を結ぶを得たり（一八六〇年）。

第七節 露國は尼布楚の條約後清國と通商條約を結ばんと欲し、使を北京に遣して貿易場を恰克圖に定め（一七一九年）、是より兩國の交通稍親密となれり。また太平洋沿岸に於ては一六九〇年堪察加を征服し、次でアラスカ樺太を占領して漸く南下し、擇捉島を侵掠して

露國の東
方經略

我戎兵と戦ひ、或はレサノットを我國に遣して通商貿易を請へり(一八〇四年)。

かくて露國の東方經略は着々其歩を進めたりしが、將軍ムラヴィヨフの東西比利亞總督たるに及び、黑龍江を探検して江口に一城を築き、時の露帝ニユライ一世の尊號を採りてニユライエウスクと名けたり(一八五〇年)已にしてクリミアの役起り、英佛二國の聯合艦隊は堪察加を襲ひしかば、ムラヴィヨフは益、黑龍江地方占領の必要を感じ、清に迫りて兩國境界の改定を求めたり。然るに當時清は長髮賊の亂に加ふるに英佛との紛議あり、廟堂頗る多事なりしを以てまた北方露國と難を構ふるを欲せず、容易に黑



ムラヴィヨフ

ムラヴィヨフ

第八第九
第十五地
圖参照

第一阿富汗
汗戰爭

龍江以北の地を割き又黑龍、松花、烏蘇里三江の自由交通權を與へたり。之を愛瑯條約と云ふ(一八五八年)。次で露國はイグナチエーフ仲裁の報酬として烏蘇里江東の地を得、境を朝鮮と接するに至れり。

第二章 中央亞細亞の形勢

第一節 一七九四年波斯は今のカヅル朝の始祖アガムハメドの占領する所となり、阿富汗斯坦は今世紀の初ドストムハメドの築する所となれり。是より先き露西亞は印度南下の策を講ずる既に久しく、次第に高加索地方を侵略し、波斯を攻めてタプリスを陥れ、悉くアラクセス河以北を占領せり(一八二八年)。然るに波斯は其以後却て露國と結び、阿富汗斯坦に侵入して、ヘラットを抄掠せしかば、印度總督オリランドは阿富汗王ムハメドに説き、同盟して之に當らんとし、ムハメドの之を肯ぜざるや、直に軍を進めてカプールを陥れ、シャー・スー

チを擁立せり(一八三九年)。然れども國人新王に服せず、ムハメドの子
 アクバールを奉じて亂を作し、駐在英軍を虐殺せしかば、印度總督エ
 レンボローは再び阿富汗斯坦を征し、舊王ドストムハメドを復し、之
 と同盟して波斯及露西亞に當りぬ。

第二節 印度に於ける英國の勢威は今世紀に及びて益揚り、マ
 ラタ、シンド、パンジブの諸國を服し、俾路芝斯坦を保護國とし(一八五
 四年)、波斯の再びヘラトを陥れたるを復しぬ。此間印度總督は漸次内
 治の改良に従事したりしが、土人は英國の羈絆を脱せんとするの念
 止む時なく、一八五七年遂に一小事件を動火として蜂起し、デルヒよ
 りパトナに至る一帯の地を攪亂せり。翌年叛亂鎮定に歸するに及び、
 莫臥兒帝は此舉に與せりとの故を以て帝位を失ひ、東印度商會の權
 利は英國政府に徙り、女王ギクトリアは一八七七年を以て印度女帝
 の尊號を加へぬ。

莫臥兒朝
 の滅亡

露國の中
 央亞細亞
 經營

第三節 露國はまた中央亞細亞よりして印度に南下せんと欲し、
 ピートル大帝の時已にプハラの經略に従事せしも、土民の反抗に逢
 ひて失敗に歸し、其後久しく等閑に附せられしが、現世紀の半頃に至
 りて再び活潑なる運動に着手し、ペロヴスキ、ゾルノイエの兩道よ
 り并び進みてタシケンドに至り、浩罕に逼りて此地方を割かしめた
 り(一八六八年)。是年露國はまたプハラを保護國としてコーヂェンド、サ
 マルカンドを奪ひ、次でヒワを屬國とし、更に浩罕の内亂に乗じて之
 を滅しぬ(一八七六年)。

第四節 一八六三年回教徒の葉爾羌に亂を作すや、張格爾の子フ
 ズルグは浩罕の將ヤクープベクと共に喀什噶爾に侵入しき。幾もな
 くしてヤクープベクはブツルグを廢して之に代り、回教徒を破りて
 天山南路の地を略し、獨立王國の承認を近隣諸國に求めたり。然れど
 も露國は之を許さずして伊犁を占領し、清國は亦左宗棠を遣りてヤ

伊犁占領
 事件

クープベクを討せしめしが、穆宗崩じて今帝載漪嗣ぎ、光緒と改元するに及び(一八七五年)漸く之を平ぐるを得しを以て、更に伊犁の還附を露國に求めたり。是に於て全權大使崇厚は露國に赴きてリワヂヤの條約を結び、露國は伊犁返還の報として銀五百萬ルーブル及テケス河上流の地を得べきとを定めたり。然るに清廷は此條約を批准するを欲せず、兩國の平和將に破れんとせしが、曾紀澤全權大使となりて再び談判を開始し、銀五百萬ルーブルを増して九百萬とし、テケス河岸の地に代ふるに霍爾果斯河以西の地を以てし、事漸く落着するを得たり(一八八一年)。

第二阿富汗
汗戦争

第五節 ドストムハメド死してシーヤアリー繼ぐに及び、英國は阿富汗斯坦を以て中立國と爲さんとし、露國の承諾を得たれども、其境界につき互に主張する所ありて決せざりき。かくてシーヤアリーは密に欺を露國に通じ、一八七八年印度總督リトンの送れる修好使

を國境より放逐せしかば、英軍は直に阿富汗斯坦を侵し、アリーを逐ひて其子ヤクープを立てたり。然るに其後幾もなくしてヤクープは英國公使一行を虐殺したりしかば、英軍進みてカプールを占領し、新にアブツルラーマンを立てぬ。露國は一八八一年アスカバドを取りメルウを略し、英國と協議して阿富汗斯坦の西北境を略しぬ(一八八七年)但し其東北バミールの界境は露、英、清三國に關聯して久しく決せざりしが、僅に一八九五年に至りて其局を結びき。

第三章 後印度諸國の形勢

第一節 緬甸は一七七六年セムブン死して子シングサー嗣ぎしも、驕暴殺を好みしが爲人心離畔し、叔父ポドーブラー代りて位に即けり。王阿臘干を略し又暹羅と戦ひてテナセリム海岸、メルグイ、タヂイ等を得しが、其後更に英領印度と葛藤を生じ、談判數次にして漸く

第九第四
地圖参照
緬甸と英
領印度と
の衝突

事無きを得たり。然れども二國の衝突は遂に免るべかず、緬軍のアッサムを征し、勢に乗じてベンゴールの北東境に入るや、二國の平和茲に



トイケンマ王羅暹

破裂し(一八二四年)、緬甸は戰破れて阿臘干、メルグイ、タヂイを割き、又償金百萬磅を出せしが、猶英人を蔑視して通商條約に背く所ありしかば、英軍再び來り攻め、毘牛マル

タパンを占領しき(一八五二年)。

緬甸の滅亡

第二節

一八七八年チーポー王位に即き、驕暴比無く、イラワーチ

一河上流に來航する英船に對して重税を課せんとし、私に歐洲諸國に請ふ所ありしかば、緬英二國の平和また破れ、英軍遂にマンダレーを陥れてチーポーを擒にし、公然其領土を擧げて英領印度の一部としき。時に一八八六年なり。

越南と佛蘭西との衝突

第三節

初め嘉隆帝の佛國の援を得るや、約して日く、事成らば化南島を佛國に讓與すべしと。然るに越南は一統の業成りし後、此盟約を實行せざるのみか、歴世概ね佛人を疾視し、又其宣教師を迫害せしかば、佛國は一八四七年始て之と戰端を開き、嗣德帝弘住の代遂に化南港柴棍等を陥れぬ(一八五八年)。會、東京には黎興の基督教徒を集めて亂を作し、使を柴棍に遣りて佛軍の援を請ふありしかば、越南は邊利、嘉定、定祥の三州を割き且つ償金二千萬フランを出して佛國と和を結び(一八六二年)、更に北伐の師を出して黎興を平げぬ。

次で佛國は東蒲塞を保護國とし、また全く下交趾支那を領し、更に

清佛戦争



東 藩 塞 の 貨 幣

紅河交通事件に關して越南と戦ひ、容易に河内南定二府を陥れたり。然るに越南は長髮賊の殘類なる黒旗兵の援を得て河内を復し、進みて南定を圍みしかば、佛將クルベールは直に順化府を衝きて其河口の砲臺を破り、協和帝の和を請ふに及び、越南を擧げて全く佛國の保護國としき。一八八三年。

第四節 然るに清國は越南を以て其藩邦とし、曾紀澤をして佛國政府に談判せしめしも、其效なく、結局越南に對する權利を放擲するに至れり。已にして佛軍の諒山を攻むるや、清の守兵は突然之を襲撃せしを以て、兩國の和茲に破れ、佛將チグリエールは陸軍を率ゐ、諒山を占領して鎮南關内に侵入し、クルベールは海軍を率ゐて大に清國艦隊を福州に破り、又臺灣の諸港を封鎖せり。會、佛國に於ては、フリー内閣倒れて外

暹羅の開國

政の方針一變し、諒山は清軍の恢復する所となり、兩國遂に一八八五年の天津條約を以て和を結び、清國は東京を佛領と爲すを承認せり。而して此地方に於ける佛國勢力の増加と共に緬甸及支那との境界に關して英、佛、清三國の紛議屢生じぬ。

第五節 一八三九年以來暹羅は東藩塞王位繼承の事に關し、屢、越南と戦ひ、遂に東藩塞南隅の三州を得て



暹羅今王チラウコン

暹羅今王チラウコン

和を結びぬ(一八四七年)。次でマングート王嗣立し、専ら開國の方針を採りて英佛諸國と通商條約を結び、長子今王チラウコンもまた頗る令名あり、夙に歐米の文化を移植して内治の改良を圖り、日本とも修交條約を結びぬ。但し近時連に佛國の威迫を被り、一八九四年遂に眉公河東の地を失ふに至れり。

第一第七
第三第四
地圖参照
日本の開
國

第四章 日清韓三國の關係

第一節 日本の徳川政府は久しく鎖國主義を採りしが、一八五三年米國軍艦の浦賀に來りて互市を請ひ、翌年通商條約を締結してより、露、英、佛、蘭の諸國相次ぎて之に倣へり。然れども猶時に下の關及鹿兒島砲擊の如き舉ありき。其後幕府は内治外交益、多難にして遂に滅び、佛國の幕府を援助せんとせしとも止み、維新の大業忽ち成りて外交の形勢一變せり。

第二節 朝鮮は仁祖以來父子相承くると五世百三十年の後、國王概ね幼弱にして即位しければ、太后數、簾を垂れて政を聽き、外戚從て權を擅にし、金氏の一族殊に甚しかりき。一八六三年今王李熙嗣立するに及び、生父李昰應大院君となりて攝政の大任を負ひ、門閥黨與を省みず、器に應じて廷臣の黜陟を行ひ、又大に西人を忌み、佛國の基督教

朝鮮の開
國

樺太境界
問題

宣教師及其信徒を虐殺せしかば、佛國軍艦は江華灣に入りて砲臺を攻陥し(一八六六年)、次で米國軍艦も亦江華島の砲臺を砲撃して、嘗て本國民の平安道に於て受けたる殘害に報いたり。然れども佛米の軍艦は幾もなくして自ら退却せしかば、大院君は氣大に揚り、露、米、日本の使を遣りて通商を求むるを拒絶し、又日本軍艦の江華灣に入れるを砲撃せり。因て日本政府は黒田清隆井上馨を遣りて之を詰らしめ、朝鮮は其罪を謝して更に修交條約を修め、釜山の外新に仁川元山二港を開くべきを約せり(一八七六年)。是より英、米、佛、露の諸國も亦皆朝鮮と條約を結びしが、朝鮮が一獨立國にして日本と同等の權利を有するものなるとは、實に一八七六年條約の明言する所なりき。

第三節 樺太境界問題は日露間に於て久しく決せざりしが、一八七五年に至りて漸く落着し、日本は千島を領し、露國は樺太全島を占有するとなれり。

琉球及臺灣問題

是より先き琉球は久しく我薩摩藩に隸し、又清國に對して藩屬の禮を取りしが、日本の琉球王尙泰を冊封して藩王となし、外務官を琉球に駐在せしめて其外交を處置するに及び、清廷頗る含む所ありき。會、琉球及備中の民の臺灣に漂着して土蕃の爲に虐殺せらるゝありしかば、日本は副島種臣を全權大臣と爲して清國に遣し、始て條約を交換し、因て臺灣の事を申理せり。然るに清は臺灣を以て化外の地なりと答へしを以て、日本は西郷從道を都督とし、兵を率ゐて臺灣を平定せしめたり。是に於て清廷は急に前言を食み、臺灣を其所屬なりとして撤兵を求め、公使柳原前光辯論すれども決せず、因て大久保利通を全權辦理大臣に任じて清國に赴かしめ、往復辯論の後事將に破れんとせしが、英國公使エード其間にありて調停する所あり、清國遂に我征臺を以て義舉となし、償金五十萬兩を出して和議全く成り、我師臺灣より凱旋せり（一八七四年）。

鎮兵の暴動

第四節 朝鮮の大院君は王妃閔氏と合はずして退隱したりしが、閔家の勢日に盛なるを見て平かなる能はず、遂に京城の鎮兵を煽動して閔氏の第を破り、又王宮に亂入せしめたり（一八八二年）。然るに暴兵は勢に乗じて日本公使館を襲撃せしかば、日本は井上馨を遣して其罪を責めしめ、償金五十五萬圓を取り、且つ公使館護衛の爲、日本軍隊を京城に駐在せしむるの承諾を得、清國も亦軍艦を派して大院君を北京に押送し、其軍隊を京城に駐在せしめたり。

第五節 是より先き朝鮮には獨立事大の二黨派起り、一は日本に頼りて自主の國體を維持せんと欲し、一は大國即ち清に事へて國政を處置せんと欲し、互に相軋りしが、閔氏の清將袁世凱と結托して事大黨獨り威を振ふに及び、獨立黨の金玉均、朴泳孝等は遂に亂を作して大臣閔泳翊等を殺し、國王を擁奉して日本公使の援護を請へり。因て公使竹添進一郎は兵を率ゐて王宮に赴きしが、適、袁世凱の閔氏を

甲申の亂

助け、兵を部署して王宮を攻撃するに及び、國王は清軍に投じ、我公使は兵を收めて日本に還り、金玉均等も亦來れり。是を甲申の亂と云ふ（一八八四年）。因て日本は井上馨を特派全權大使となし、朝鮮に遣して償金十三萬圓を出さしめ、又伊藤博文西郷從道を清國に派して其大臣李鴻章と天津に會議せしめ、兩國均しく朝鮮駐紮兵を撤回し、將來兵員派遣の必要あらば互に行文照知すべきを約せり。所謂天津條約是なり（一八八五年）。

天津條約

日清戦争
の原因

第六節 次で大院君は清國より放還せられたるも亦政務に與るを得ず、朝鮮に於ける清國の勢威は愈増加し、金玉均の上海に暗殺せらるゝや、軍艦を以て其屍を朝鮮に送りき。已にして慶尙全羅兩道には東學黨の亂起り、勢頗る猖獗なりしかば、清國欽差總辦袁世凱は朝鮮に勸めて援を清國に求めしめ、清兵來りて牙山に上陸したり。因て日本も亦兵を京城に派し、全權公使大島圭介をして袁世凱に提議し、

力を協せて朝鮮の國政を改革せんとせり。然るに此議遂に協はざりしかば、日本は獨力を以て朝鮮を扶持するに決し、大院君を起して國政を攝せしめ、先づ牙山の清兵を擊攘し、我海軍も亦既に豊島沖に清艦と砲火を交へ、彼我互に宣戰を公布するに至れり（一八九四年）。

日清戦争

第七節 かくて我第一軍の司令官山縣有明は平壤を拒守せる清軍を擊退して九連城に進み、聯合艦隊司令官伊東祐亨は北洋水師と海洋島の沖に戦ひて大に敵艦を破り、海上の權力全く我に歸するに至れり。かくて第二軍の司令官大山巖は容易に花園口に上陸し、金州旅順を陥れて蓋平に進み、九連城鳳凰城を擊破して海城に出でたる第一軍と聯絡を通じ、相合して牛莊田庄臺を抜き、別軍は更に澎湖島を略し、又威海衛を陥れ、我軍將に直隸省に進撃せんとせり。

第八節 是に於て清廷は勢屈し、李鴻章を全權大臣と爲し、日本に派して和を請ひしかば、我全權委員伊藤博文陸奥宗光は之と馬關に

日清の媾
和

會商して媾和條約を結び、清國は朝鮮の獨立を確認し、遼東半島、臺灣、並に其附屬諸島、澎湖列島を割讓し、二億兩の償金を出し、又沙市、重慶、蘇州、杭州の四港を開くべきを約せり（一八九五年四月）。然るに露西亞は獨逸佛蘭西を誘ひ、我に勸むるに遼東半島の領有を永久にするに無からんを以てせしかば、我政府は時勢の止む可からざるを察して其勸告を容れ、日清媾和條約の公布と共に遼東半島還附の詔敕を發し給ひぬ。實に是歲五月十日の事なり。

第五章 清代の文化

官制

第一節 清は明の遺制を襲げる所多しと雖も、力めて滿州の國俗を保たんとせり。官制は内閣を中心とし、大學士協辦大學士其機務に參し、吏、戶、禮、兵、刑、工六部の衙門之に隸して各政務を分擔し、軍機處は軍國の大事を處決し、總理衙門は外交の事を掌り、都察院は官吏を糾

劾し、理藩院は内外蒙古、天山南北路、西藏、青海等の政令を掌り、通政使司は章奏を通達す。又外官には數省に總督あり、各省に巡撫ありて政令を統べ、布政使は財政を掌り、按察使は刑獄を理し、其他道臺、知府、知州、知縣ありて民治を掌れり。但し滿州には將軍都統ありて軍民を治め、別に盛京省には戶、禮、兵、刑、工五部の侍郎あり。凡そ京官の人員は滿人漢人の數必ず相等しく、而して人材の登用は多く、鄉試、會試、殿試の法によれり。

兵制

第二節 兵制は陸軍を分ちて八旗、綠旗、鄉勇の三とし、水師を分ちて北洋、南洋、長江、福建、廣東の五とす。八旗には滿州八旗、蒙古八旗、漢軍八旗あり、或は京師を護衛し、或は地方に駐防す。每旗皆都統、副都統ありて之を統轄せり。綠旗は明の滅後漢人を編制して各省に駐屯せしめたるものにして、提督總兵之を指揮す。鄉勇は長髮賊の亂に際し、始めて召募せる所の壯兵にして、亂後各省に置かるゝに至れり。

財政

考證學

第三節 財政は京師と地方とに分れ、糶糧造幣關稅鹽課茶課人參課は政府の收入に歸して戸部之を掌り、地賦丁賦雜賦耗羨は各省の收入に歸して布政使之を掌り、地賦は夏稅秋糧と云ひて毎歲二期に徵收し、丁賦は成丁未成丁富戶貧戶等の別を立て、之を課し、雜賦は課租稅貢の四に分れ、耗羨は地賦丁賦の定額外に課するものなり。

第四節 明末以來學者漸く性理學の空疎なるを厭ひ、古義を推闡して臆測の説を排斥するの學風起り、顧炎武字はの如き實に其稱首たりき。是を考證學派と稱す。聖祖高宗出づるに及びて大に文學を獎勵し、佩文韻府淵鑑類函康熙字典大清會典四庫全書總目提要等を敕撰して經史の研究に資せしめしより、考證學は益盛行し、閻若璩字は、毛奇齡字は、惠棟字は、戴震字は等の諸大家前後輩出せり。然れども學校又選舉に於ては皆宋説を用ふるを以て、宋學も亦學者の標準とする所なりき。

詩文

史學と地理學

詩文は清に至りて其風屢變じ、或は周秦に摸倣し、或は唐宋に歸依し、侯方域魏禧汪琬の文に王士禛吳偉業蔣士銓の詩に名聲を馳せ、又朱彝尊方苞の經學文章に兼長ずるありしと雖も、要するに韓柳を規摸とし、歐蘇を典型とするに止りて、未だ一代の宗匠たる能はざりき。小説には紅樓夢あり、戯曲には李漁の笠翁十種曲蔣士銓の紅雪樓九種曲あり、又金聖歎は戯曲小説の批評を以て有名なりとす。

第五節 清代歴史の編纂せられたるもの少からず、乾隆帝の批評を加へられたる御批通鑑輯覽張廷玉等の明史徐乾學の資治通鑑後篇畢沅の續資治通鑑等の如し。又趙翼が二十二史劄記陔餘叢考は考證正確にして論斷頗る適切なり。地理學は明時東西の交通開けしより頗る進み、敕撰には大清一統志十八省通志あり、民間には顧炎武の天下郡國利病書顧祖禹の讀史方輿紀要魏默源の海國圖誌等の好著あり。

第六節 佛教は清に至りて益衰頽し、天台、華嚴、法相、眞言、淨土諸宗は纔に其命脈を存するに過ぎず、僧侶は概ね學力と規律とを缺き、經を講じ人を教化する等の事無し。之に反して喇嘛黃教は西藏、滿州、蒙古に行れ、回々教は天山南路、甘肅、陝西地方に行れしが、其徒屢清人と衝突しき。道教は明代に痛く抑損せられしも猶勢力を有し、道士は皆黃衣黃冠を着けて修養、練丹、符録を行へり。基督舊教は明末リ、チーの欽天監となりて天文の考察を掌りしより、清朝も亦其例に倣ひ、且つ北京に二箇の天主堂を建てたり。爾後信徒各省に遍く、一八七九年の羅馬府宗教總會は、支那全部に宣教區を定めて布教に盡力せしめき。新教は初め沿岸各港に於て行れしが、漸く進みて北京に及び、今は各省の内地に弘布し、また其宣教師は概ね英米人にして、舊教宣教師の如く支那官民に疾視せられざるに似たり。

中等教育
東洋歴史終

年表

紀元前

(* 符を附したるは
大略の数を示す)

- * 三二〇八 夏の建國
- * 三〇〇〇 アリア人パンツァブに入る
- * 二七七六 殷の建國
- * 二二二二 周の建國 箕子朝鮮に入る
- * 八四二 厲王姁に奔る
- 七七〇 平王の即位 周室の東遷
- 七二一—四八一 春秋時代
- 六五六 召陵の盟
- 六三八 宋楚泓水の邊に戦ふ
- 六三二 晋楚城濮に戦ふ 踐土の會
- 六二七 晋秦崤に戦ふ
- 五九七 晋楚邲に戦ふ
- 五五一—四七九 孔子
- 四九六 吳越携李に戦ふ

年表

- 四八二 黄池の會
- * 四七八 釋迦の入滅
- 四七三 吳滅ぶ
- 四〇三—二二一 戰國時代
- 四〇三 晋の三氏韓魏趙諸侯となる
- 三八六 齊田氏諸侯となる
- 三五九 商鞅秦の法を定む
- 三三四 越滅ぶ
- 三三三 蘇秦合従を成す
- 三二七—三二五 アレクサンドロスの印度遠征
- 三二八 函谷關の戰
- 三二六 旃那羅、笈多の即位
- 三一一 張儀連衡を成す
- 三〇六 メガステネス波吒釐子に使す
- 二八六 齊湣王宋を滅す
- 二六〇 秦趙長平に戦ふ
- 二六〇 達磨、阿育王の即位
- 二五六 西周滅ぶ
- 二四九 東周滅ぶ

- 二四六—二一〇 秦王政位に即く
- 二三〇 韓滅ぶ
- 二二八 趙滅ぶ
- 二二五 魏滅ぶ
- 二二三 楚滅ぶ
- 二二二 燕滅ぶ
- 二二一 齊滅ぶ 郡縣の制を布く 秦王政始皇帝と號す
- 二一五 長城を修築して匈奴に備ふ
- 二一三 詩書百家の語を燒く
- 二〇九—二〇七 二世帝胡亥
- 二〇六 秦の滅亡 項籍西楚の霸王となる
- 二〇五—二〇二 楚漢の分争
- 二〇二—一八八 漢高祖帝
- 一九三 漢匈奴と和す
- *一九四 衛滿朝鮮王となる
- 一七九—一五八 孝文帝
- 一七九 南越王趙佗漢に貢す
- 一五六—一四一 孝景帝
- 一五四 吳楚七國の叛

- 一四〇—一八七 孝武帝
- 一三六 五經博士を置く
- *一二八 大月氏鳩水の北に國す
- 一二七 衛青匈奴を破る
- 一一九 霍去病狼居胥山に封す
- 一一五 西域始て通す
- 一一一 南越を平ぐ 西羌を平ぐ 西南夷を平ぐ
- 一〇九—一〇八 朝鮮を征す
- 九一 司馬遷の史記成る
- 八六—七四 孝昭帝
- 八四 烏桓を征す
- 七三—四九 孝宣帝
- 六六 霍氏の叛
- 六〇 鄭吉を西域都護に任ず
- 五七 匈奴五單于立つと争ふ 新羅の建國
- 三七 高句麗の建國
- 一八 百濟の建國
- 紀元後
- 八一—三 王莽

- 二五—五七 後漢光武帝
- *四〇 迦膩色迦王
- 四二 馬援交趾を平ぐ
- 五一 匈奴南北に分る
- 五七 委奴國漢に通す
- 五八—七五 孝明帝
- 六七 迦葉摩騰竺法蘭漢に入る
- 七三 耿秉等大に北匈奴を破る
- 七四 西域諸國復漢に通す
- 七六—八八 孝章帝
- 八七 北匈奴の衰耗
- 八九—一〇五 孝和帝
- 九四 班超焉耆大月氏を征す

- 一四七—一六七 孝桓帝
- 一六六 大秦漢に通す 黨人の獄
- 一八四 黃巾の賊起る
- 一八九 袁紹宦官を誅す
- *一九四 那伽閼刺樹那死す
- 一九六 曹操獻帝を許に奉す

- 二〇八 赤壁の戰
- 二二〇 魏曹丕帝と稱す
- 二二一 蜀劉備帝と稱す
- 二二九 吳孫權帝と稱す
- 二三四 諸葛亮卒す
- 二三八 魏遼東を平ぐ
- 二六三 蜀滅ぶ
- 二六五 魏滅ぶ
- 二六五—二八九 晋武帝
- 二八〇 吳滅ぶ

- 三〇一—三〇六 八王の亂
- 三〇一—三三六 前涼張氏
- 三〇四—三二九 漢(前趙)劉氏
- 三〇四—三四七 成(漢)季氏
- 三〇八—三七七 代拓跋氏
- 三一七—三三二 東晋中宗元帝
- 三一九—三五〇 後趙石氏
- 三二〇—三七〇 前燕慕容氏
- 三四二 前燕後句麗を伐つ
- 三五—三九四 前秦苻氏

- 三七二 佛教高句麗に入る
- 三八三 肥水の役
- 三八四—四〇九 後燕慕容氏
- 三八四—四一七 後秦姚氏
- 三八五—三九四 西燕慕容氏
- 三八五—四三一 西秦乞伏氏
- 三八六 拓跋珪代王となる
- 三八六—四〇三 後涼呂氏
- 三九七—四一四 南涼秃髮氏
- 三九八—四一〇 南燕慕容氏
- 三九八 拓跋珪魏帝と稱す後魏
- *四〇〇 法顯印度に赴く
- 四〇〇—四二一 西涼李氏
- 四〇三 桓玄叛す
- 四〇九—四三六 北燕馮氏
- 四〇九 鳩摩羅什寂す
- 四一三 高句麗長壽王立つ
- 四二〇 宋武帝晋を簒す
- 四二九 魏太武帝柔然を征す
- 四四五 宋元嘉曆を行ふ

- 四四六 魏佛教を迫害す 宋林邑を平ぐ
- 四七九 齊高帝宋を簒す
- 四九三 魏都を洛陽に遷す
- 五〇二 梁武帝齊を簒す
- 五二〇 菩提、達摩來る
- 五三五 魏東西に分る
- 五四八 侯景の亂
- 五五〇 北齊文宣帝東魏を簒す
- 五五二 百濟佛像經論を日本に傳ふ
- 五五七 陳武帝梁を簒す 後周孝閔帝西魏を簒す
- 五六二 任那滅ぶ
- 五七七 北齊滅ぶ
- 五八一 隋高祖後周を簒す 突厥分裂す
- 五八九 陳滅ぶ 南北の一統
- 五九一 吐谷渾隋に通ず
- 五九八 高麗を伐つ
- 六〇〇 羯若鞠奢王尸羅阿迭多立つ
- 六〇五—六一六 煬帝 通濟渠を穿つ
- 六〇七 小野妹子隋に使す

- 六一二 煬帝遼東城を攻めて克たず
- 六一八 唐高祖帝
- 六一九 西突厥入貢す
- 六二七—六四九 太宗帝
- 六二九—六四五 玄奘五天竺を周遊す
- 六三〇 遣唐使の始 東突厥を破る
- 六三二 モハメッド歿す 阿羅本長安に入る
- 六四〇 高昌を滅す
- 六四一 チハゴンドの戰
- 六四五 太宗高麗を征す
- 六四六 薛延陀を平ぐ 鐵勒諸部唐に歸す
- 六四八 王玄策天竺に使す
- 六五〇—六八三 高宗帝
- 六五七 西突厥を破る
- 六六〇 百濟を伐つ
- 六六一—七五〇 オミア朝
- 六六三 百濟滅ぶ
- 六六八 高麗滅ぶ
- 六九〇—七〇五 則天武后
- 七一三—七五五 玄宗帝

- 七一一 大祚榮渤海郡王となる
- 七三八 南詔を冊して雲南王と爲す
- 七四二 崇玄館を開く
- 七四五 回紇突厥を滅す
- 七五〇—一二三三ハ アバス朝
- 七五五 安祿山叛す
- 七五六—七六二 肅宗帝
- 七六三—七七九 代宗帝
- 七六三 内亂平定す 李白卒す
- 七六五 回紇吐蕃入寇す
- 七七〇 魚朝恩誅に伏す 杜甫卒す
- 七八〇—八〇四 德宗帝
- 七八〇 始て兩税法を作る
- 七八八 回紇回鶻と改號す
- 八〇六—八二〇 憲宗帝
- 八二四 韓愈卒す
- 八二七—八四〇 文宗帝
- 八三五 甘露の變
- 八四〇 黠戛斯回鶻を破る
- 八四一—八四六 武宗帝

- 八四五 佛寺を毀ち僧尼を還俗せしむ
- 八四七—八五九 宣宗帝
- 八五一 黨項を平ぐ
- 八五九 南詔大理と號す
- 八六〇 大理交趾を陥る
- 八八〇 黃巢大齊皇帝と僭號す
- 八九五—九三六 後唐李氏
- 九〇二—九三七 吳楊氏
- 九〇三—九二五 前蜀王氏
- 九〇四—九七六 吳越錢氏
- 九〇七 後梁太祖帝唐を篡す
- 九〇七—九五二 楚馬氏
- 九〇九—九一四 燕劉氏
- 九〇九—九四五 閩王氏
- 九一六 契丹阿保機帝と稱す
- 九一七—九七〇 南漢劉氏
- 九一八 王建高麗を立つ
- 九二三 後唐莊宗帝梁に代る
- 九二四—九六三 荆南高氏
- 九二六 契丹渤海を降す

- 九二七—九四七 契丹太宗帝
- 九三三—九六五 後蜀孟氏
- 九三六 後晉高祖帝後唐に代る
- 九三七 契丹國號を遼と改む
- 九四七 遼太宗帝大梁に入る 後漢高祖帝後晉に代る
- 九五二—九七七 後周太祖帝後漢に代る
- 九五二—九七七 北漢劉氏
- 九五四 高平の戰
- 九六〇 宋太祖帝後周に代る
- 九七二 大藏經の印行
- 九七六—九九七 宋太宗帝
- 九七九 宋遼と絶つ
- 九八二 李繼遷叛く
- 九八三—一〇三〇 遼聖宗帝
- 九九七—一〇三〇 鶴悉那のマイムド
- 九九八—一〇二二 宋眞宗帝
- 一〇〇四 澶淵の盟
- 一〇〇七 交趾李公蘊立つ
- 一〇二二—一〇六三 宋仁宗帝

- 一〇三二 西夏李元昊立つ
- 一〇三二—一〇五四 遼興宗帝
- 一〇四一 西夏大舉宋を犯す
- 一〇四二 遼關内の地を求む 富弼遼に使す
- 一〇五二 僂智高南國を建つ
- 一〇六八—一〇八五 宋神宗帝
- 一〇六九—一〇七二 王安石の新法
- 一〇七二 歐陽修卒す
- 一〇七二—一〇九二 マレク・シャハ
- 一〇七五 宋地を割きて遼に與ふ 交趾宋を犯す
- 一〇八三 宋西夏と和す
- 一〇八六—一〇一〇 宋哲宗帝
- 一〇八六 元祐の更化
- 一〇九四 紹聖の紹述
- 一一〇一—一一二五 徽宗帝 遼天祚帝
- 一一〇七 程頤卒す
- 一一〇四 童貫吐蕃を伐つ
- 一一一二 蘇轍卒す
- 一一一五 金太祖帝位に即く
- 一一二〇 宋金連合の約成る

- 一一二二 燕京陥る
- 一一二二—一一三四 金太宗帝
- 一一二五 遼の滅亡 耶律大石西遼を立つ
- 一一二六 宋欽宗帝 金軍汴京を圍む 高麗藩を金に稱す
- 一一二七 金軍徽宗欽宗を執ふ
- 一一二七—一一六二 宋高宗帝
- 一一二九 宗室の南渡
- 一一三五—一一四八 金熙宗帝
- 一一四一 金宋の和成る 岳飛殺さる
- 一一六一—一一八九 宋孝宗帝
- 一一六三—一一八九 宋孝宗帝
- 一一八六—一二〇六 ゴルの阿富汗人の全盛時代
- 一一九二 陸九淵卒す
- 一一九五—一二二四 宋寧宗帝
- 一一九七 偽學の黨を禁す
- 一二〇〇 朱熹卒す
- 一二〇六 金軍入寇す 蒙古成吉思汗即位す
- 一二〇六—一二八八 印度奴隸朝
- 一二〇九 蒙古夏主李安全を降す

- *一二二一 屈出律西遊を築す
- 一二二四—一二三三 金宣宗帝
- 一二二八 蒙古西遊を滅す
- 一二三一 成吉思汗哥疾寧に至る
- *一二三二 蒙古軍阿羅思を侵す
- 一二三四—一二三四 金哀宗帝
- 一二三五 成吉思汗和林に遷る
- 一二二七 蒙古西遊を滅す 成吉思汗崩す
- 一二二九—一二四一 蒙古窩闊台汗
- 一二三二 蒙古兵銃砲を用ふ
- 一二三四 金の滅亡
- 一二三六—一二三七 蒙古軍不里阿耳を征す
- 一二四〇 蒙古軍乞瓦を抜く
- 一二四一 ワールスタットの戦 高麗蒙古に通ず
- 一二四三 援都欽察國を建つ
- 一二五一—一二五九 蒙古蒙哥汗
- 一二五三 忽必烈大理吐蕃を降す
- 一二五七 蒙古宋を侵す 兀良合台交趾を降す
- 一二五八 旭烈兀八吉打を陥る
- 一二六〇—一二九四 蒙古忽烈汗立つ元世祖

- 一二六〇 蒙古交鈔法を行ふ 八思巴帝師と爲る
- 一二六七 察合台欽察と結びて元に抗す
- 一二七一 蒙古元と號す
- 一二七四 元兵對馬壹岐に寇す
- 一二七五 マルコ・ポロ忽必烈汗に謁す
- 一二七六 伯顔臨安を降す
- 一二七九 厓山の役 宋の滅亡
- 一二八一 元軍日本を攻めて大敗す
- 一二八二 緬占城を征す
- 一二八五、一二八七 安南を征す
- 一二九二 瓜哇を征す
- 一二九〇—一二三〇 印度キルマ家
- 一三〇三 察八兒降順す
- 一三二〇—一三二五 キアス・ウ・ド・ヂ
- 一三三三—一三六七 順宗帝
- 一三五〇—一三八八 フヘル・ツクラク
- *一三五〇 倭寇の始
- 一三六六—一四〇五 帖木兒伯克
- 一三六八—一三九八 明太祖帝
- 一三七七 暹羅明の封冊を受く

- 一三九二 李成桂朝鮮を建つ
- 一三九七 足利義滿明に通ず
- 一三九九 鬼力赤鞏鰐の可汗となる 帖木兒アルヒを陥る
- 一三九九—一四〇二 惠帝

- 一四〇一 安南黎季犛自立す
- 一四〇二 アンゴラの役
- 一四〇三—一四二四 成祖帝
- 一四〇七 交趾布政使を置く
- 一四一〇 明軍大に本雅失里を破る
- 一四一四 印度ゾクラク朝の滅亡
- 一四二八 黎利大越皇帝と稱す
- 一四三四 瓦剌阿魯台を殺す
- 一四三六—一四四九 英宗帝
- 一四四九 土木の役
- 一四五〇—一四五七 景宗帝
- 一四五四 阿剌也先を殺す
- 一四九八 プスコ・ダ・ガマ印度に達す

一五一〇 劉瑾誅に伏す 葡萄牙人臥亞を取る

- 一五一七 王守仁叛徒を平ぐ 葡萄牙商船支那海に入る
- 一五二二—一五六六 世宗帝
- 一五二六 バベル莫臥兒朝を立つ
- 一五二八 安南の莫登庸自立す
- 一五四二 葡萄牙人大隅種子島に来る
- 一五四二 俺答山西に寇す
- 一五四九 ハルビン鹿兒島に来る
- 一五六三 倭寇漸く衰ふ
- 一五五六—一六〇五 アクパール
- 一五七一 西班牙人マニラを建つ
- 一五七三—一六一九 神宗帝
- 一五七九 英吉利人印度に達す
- 一五八三 奴爾哈赤(清太祖)兵を起す
- 一五九二 豊臣秀吉朝鮮を伐つ
- 一五九四 廟憲成罷めらる
- 一五九六 和蘭人蘇門答刺パンタムに達す
- 一五九七 豊臣秀吉再び朝鮮を伐つ

一六〇〇 英國東印度商會の設立 廣南阮福横自立す

- 一六〇一 マテオ、リッチー、燕京に達す
- 一六二四 和蘭人臺灣に據る
- 一六二七—一六五九 シャー・シェハン
- 一六二七 皇太極(清太宗)立つ
- 一六二九 季自成張獻忠兵を起す
- 一六三六 清國號を立つ 清朝鮮を降す
- 一六三九 英人マドラスを建つ
- 一六四四—一六六一 清世祖帝
- 一六四四 李自成北京を陥る 明莊烈帝崩す
- 北京に入る 清軍
- 一六五九—一七〇七 オイラングヅェン
- 一六六一 鄭成功臺灣に據る
- 一六六二—一七二二 聖祖帝
- 一六六八 英人孟買を立つ
- 一六七三 吳三桂叛す
- 一六八一 三藩の亂平ぐ 露人雅克薩を取る 顧炎武卒す
- 一六八三 臺灣清に入る
- 一六八八 噶爾丹喀爾喀を復す
- 一六八九 尼布楚條約

- 一六九〇 烏爾布通の戰 露人堪察加を略す
- 一六九七 准噶爾平定す
- 一七一六 康熙字典成る
- 一七三〇 西藏を平ぐ
- 一七三三—一七三五 世宗帝
- 一七三四 青海を略す
- 一七三五 清準噶爾と和す
- 一七三六—一七九五 高宗帝
- 一七三八—一七三九 波斯王ナデル・シャー 印度を侵す
- 一七四一 チェンブレイ、ボンヂツシヨリ 總督となる
- 一七四七—一七七三 アイメッド、シャー
- 一五五七 準噶爾の鎮定 フラッシーの戰
- 一七五八 クライヴ始てベンゴール總督となる
- 一七六二 回部の平定
- 一七七二 ヘスチングス、ベンゴール總督となる
- 一七七五 索諾木清に降る
- 一七七六 緬甸王ゼムアエン死す
- 一七八三 緬甸阿臘干を略す
- 一七八六 阮文惠東京を降す
- 一七八八 清安南を征す 阮福映下交趾支那を定む

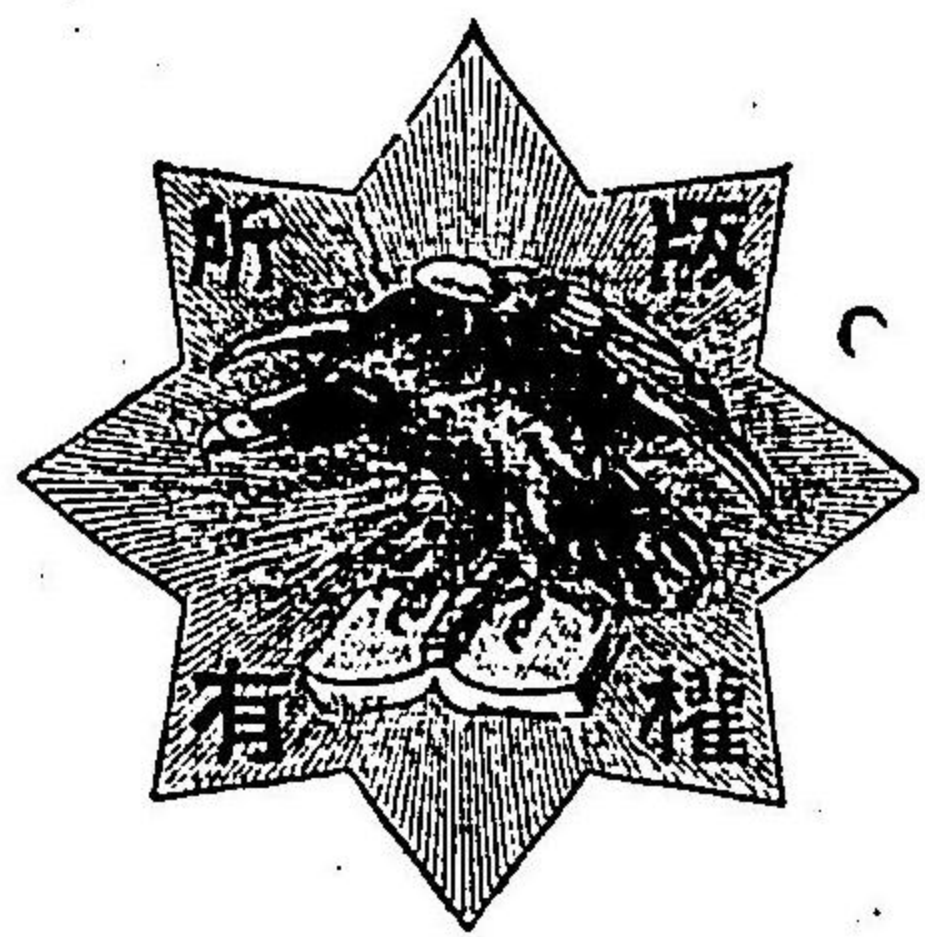
- 一七九二 廓爾喀征伐
- 一七九三 緬甸テナセリム海岸を略す
- 一七九四 波斯カジャール朝の興起
- 一七九六—一八二〇 仁宗帝
- 一八〇二 越南國を建つ
- 一八〇四 露使レサノフ、日本に来る
- 一八二一—一八五〇 宣宗帝
- 一八二四 緬甸英國と戰ふ
- 一八二六 ドストムハメッド、カブールの主となる
- 一八三八—一八四二 第一阿富汗戰爭
- 一八三九 清國英商の阿片を燒く
- 一八四〇—一八四二 鴉片戰爭
- 一八四七 暹羅東浦塞の南隅三州を得
- 一八四九—一八六四 長髮賊の亂
- 一八五〇 露人ニコライエヴスクを建つ
- 一八五一—一八六一 文宗帝
- 一八五二 緬甸英國と戰ふ
- 一八五三 米糧浦賀に来る
- 一八五四 佛路芝斯坦英國の保護國となる
- 一八五六 アロー 號不法搜索事件

- 一八五七—一八六〇 英佛同盟軍の來寇
- 一八五七 印度土兵の叛亂
- 一八五八 愛理條約 佛國越南と戰ふ
- 一八六〇 露國烏蘇里江東の地を得
- 一八六二—一八七四 穆宗帝
- 一八六二 越南佛國と和す
- 一八六三—朝鮮今王李熙
- 一八六六 佛艦江華灣を衝く
- 一八六八—暹羅今王チュロンコルン
- 一八六八 露國フハラを保護國とす
- 一八七三 露國ヒヲを屬國とす
- 一八七四 佛國越南を侵す 日本臺灣を征す
- 一八七五—清今帝載滌 千島樺太の交換
- 一八七六 露國浩罕を滅す 朝鮮の開國
- 一八七七 英女王ヴィクトリア 印度女帝の尊稱を加ふ
- 一八七八—一八七九 第二阿富汗戰爭
- 一八八一 伊犁問題解く
- 一八八二 朝鮮京城鎮兵の騒亂
- 一八八三 越南佛國の保護國となる
- 一八八四 清佛戰爭 甲申の亂

- 一八八五 清佛の天津條約 日清の天津條約
- 一八八六 緬甸英領となる
- 一八八七 阿富汗斯坦境界問題解く
- 一八九四 暹羅眉公河東の地を失ふ 日清の開戦
- 一八九五 日清の媾和 遼東半島の還附
- 一八九六 バミール境界問題落着す

明治卅一年三月二十日印刷
 明治卅一年三月廿五日發行

定價金八拾錢



編者 木寺柳次郎

發行者 大橋新太郎

印刷者 愛敬利世

印刷所 株式會社 秀英舍

東京日本橋區本町三丁目八番地

東京日本橋區四紺屋町廿六七番地

發兌元

東京日本橋區
本町三丁目

博文館

文學士 木寺柳次郎君編

中等教育 西洋歴史

全壹冊背皮
金字入上製
正價金七拾錢
郵税拾錢

沿革地圖十八圖入

西洋密圖三十八個入

目次
●古代史 埃及及西南亞細亞
●中世史 西羅馬帝國の滅亡よりエルダン條約まで
●近世史 エルダン條約より大空位時代まで
●最近世史 大空位時代より佛蘭西革命まで
●年表 佛蘭西革命より今日まで

歴史の書汗牛充棟、その中等教育の名を冠する者亦た少なからず、本書の著者別に見る所あるに從ひ漸く精細ならしめ、固有名詞の發音は、其時代と國々とに從ひ、多く精巧なる地圖と繪畫とを挿入し、西洋歴史を一體として説くことに三たび意を致せり、是等即ち本書の特長にして、從來世にある所の、萬國史と異なるどころなりとす。

高等師範萩野由之先生著(沿革地)
學校教授(附挿入)

中等教育 日本歴史

全二冊洋裝背皮
金字入頗美本
正價金壹圓拾錢
郵税十、六錢

附録
●御歴代略表 天皇御系圖
●諸國封建沿革略
●大臣大連三氏略系、藤原氏略系、平氏略系、源氏略系、鎌倉將軍略譜、北條氏略系、足利氏略系、足利將軍略譜、徳川氏略系、徳川將軍略譜

著者の我國史學に深きとは世皆己に之を知る。本書は筆を日本の地形、建國の體裁、政治の變遷に起し、進みて太古史、近古史に及び、遂に廿七八年戰役、臺灣鎮定に終る。而して各史編未附するに、制度風俗の沿革を以てす、文辭明快、敘事富麗、而して特に前版の註漏を正し、最も現今の中等教育程度時間に適切ならんとに意を用ひられたるものなれば、中等學校師範學校其他中等教育程度の學校教科書として、最も適當の良書なり、其紙質の良好、印刷の鮮明、製本の堅牢なる、亦前版に比して更に一層の改良を施せり。

本書は各府縣中學校、師範學校等五十餘校の教科用書として既に御採用の榮を得たり

文學士 有賀長雄先生著

訂增 帝國史略

全壹冊背皮金字入
菊列紙數千餘頁
正價金壹圓七拾錢
郵税貳、拾錢

本書は、著者が多年講究の餘に出でたるものにて、主として日本國民の變遷に於ける、原因結果の次第を明かにせるもの、事實は一に正史に據りて、最も正確に、行文は簡明にして通暢なり。一讀帝國史の要領を得るに於て、物を發に探ぐるが如けん。

文學士 中原貞七先生著

中等教育 萬國歴史

全貳冊背皮金字入
總紙數壹千餘頁
正價金壹圓貳拾錢
郵税六錢

本書は分つて二巻とし、支那と歐洲との兩中心を立て、上巻は東部蒙古人種を一貫し、他は西部アリア人種を一貫し、以て其發達實相を描き、而して東洋文明の中心として、日本人種を置く、是れ歴史編纂の一新面を開き、東西文明の真相を發揮し、其極致を融合一致するに於て、大裨益を與ふるのみならず、中等教育教科書として、最上乘なり。苟も歴史教育に志ある士は、坐右に備へて可なり。

松井廣吉先生著
 ●新撰大日本帝國史 全壹冊洋裝並製 正價四拾錢 郵稅拾錢
 足立栗園先生著
 ●通俗日本歷史 全壹冊洋裝並製 正價貳拾五錢 郵稅八錢
 小中村義象、落合直文兩先生著
 ●新撰日本外史 全壹冊洋裝並製 正價壹圓廿錢 目方四百目
 增田千信先生著
 ●新撰日本小歷史 全壹冊洋裝並製 正價拾五錢 郵稅六錢
 谷口政德先生著
 ●訂正增補日本小歷史 全壹冊洋裝並製 正價拾貳錢 郵稅壹錢五厘
 今泉定介先生著
 ●初等日本歷史 全二冊和裝 正價貳拾四錢 郵稅六錢
 增田千信先生著
 ●高等日本歷史 全二冊洋裝並製 正價五拾錢 郵稅拾四錢
 大和田建樹先生著
 ●新體日本歷史 全二冊洋裝並製 正價二十四錢 郵稅八錢
 內山正如先生著
 ●問答日本歷史一千題 全壹冊洋裝並製 正價拾貳錢 郵稅四錢

永江正直先生著
 ●繪入日本歷史 全壹冊和裝 正價拾錢 郵稅貳錢
 萩野由之先生著
 ●日本歷史評林 全三冊洋裝並製 正價壹圓五拾錢 目方八百目
 林羅山先生著
 ●註本朝通鑒 全八十四冊和裝箱入 正價拾參圓 目方三頁目
 大橋學橋先生校註
 ●明治日本政記 全拾冊和裝木版刷 正價壹圓六拾錢 目方四百目
 內藤唯見先生編
 ●德川十五代史 全十二冊洋裝 正價壹圓六十錢 郵稅壹圓六錢
 小宮山南梁先生編
 ●德川太平記 全三冊洋裝並製 正價壹圓五拾錢 目方八百目
 坪谷善四郎先生編
 ●明治歷史 全二冊洋裝並製 郵價六拾錢 郵稅六錢
 坪谷善四郎先生著
 ●通俗明治歷史 全壹冊洋裝並製 正價貳拾五錢 郵稅八錢
 岸上質軒先生著
 ●通俗德川十五代史 全壹冊洋裝並製 正價貳拾五錢 郵稅八錢

文學士 幸田成友先生著
 ●十九世紀史 全壹冊洋裝並製 正價五拾錢 郵稅拾貳錢
 長谷川天溪先生著
 ●通俗世界歷史 全壹冊洋裝並製 正價貳拾五錢 郵稅八錢
 大和田建樹先生著
 ●新體萬國歷史 全貳冊洋裝並製 正價貳拾四錢 郵稅八錢
 谷口政德先生著
 ●受驗萬國小歷史 全壹冊洋裝並製 正價拾貳錢 郵稅一錢五厘
 高橋光威、稻見紀一郎兩先生著
 ●萬國歷史問答大全 全壹冊上製 正價拾八錢 郵稅八錢
 川崎紫山先生著
 ●印度史 全壹冊洋裝並製 正價參拾錢 郵稅三錢
 川崎紫山先生著
 ●魯國史 全壹冊洋裝並製 正價參拾錢 郵稅三錢
 須永金三郎先生著
 ●英國史 全壹冊洋裝並製 正價參拾錢 郵稅三錢
 加賀喜一先生著
 ●繪入萬國歷史 全壹冊和裝 正價拾錢 郵稅貳錢

山名善讓先生訓點
 ●資治通鑑 全七十冊和裝木版刷 正價拾三圓 目方三頁目
 石川鴻齋先生訓點
 ●點五代史 全八冊和裝木版刷 正價壹圓四拾錢 郵稅十八錢
 矢土錦山先生訓點
 ●廿一史言行畧 全六冊和裝木版刷 正價壹圓 郵稅拾貳錢
 藤田梁言先生著
 ●中等支那史 全七冊和裝木版刷 正價壹圓 郵稅拾錢
 川崎三郎先生著
 ●新撰支那國史 全三冊上製 正價壹圓廿五錢 郵稅壹圓八錢
 內山正如先生著
 ●問答支那歷史一千題 全壹冊洋裝並製 正價拾貳錢 郵稅四錢
 中西牛郎先生著
 ●支那文明史論 全壹冊洋裝並製 正價三拾五錢 郵稅六錢
 小中村義象、增田千信兩先生著
 ●中等日本文學史 全壹冊洋裝並製 正價貳拾五錢 郵稅六錢
 澁江保先生著
 ●歷史研究法 全壹冊洋裝並製 正價壹圓拾錢 郵稅壹圓四錢

第一高等學校教授落合直文先生著 (文部省 檢定済)

中等 文法教科書

全壹冊洋裝
正皮金字入
正價四拾五錢
郵税八錢

本書は、中等教育の教科用書に適用せしむる目的を以て、多年斯學の教育に經驗深き、落合先生が著されたるものなれば、その生徒の學力と學校の時間とを參酌して、繁簡其宜に適ひたる、蓋し稀有の良書たるべし。

第一高等學校教授 落合直文先生著

日本文典

全四冊
大洋裝
本判裝

定價 自第壹編至第參編 壹冊四拾錢
第四編壹冊四拾五錢 郵税一冊六錢

世に文法を學ぶべき書多しと雖、何れも完全ならざるは世人の認むる所也。落合先生常に之を歎せられしが、幾多の春秋を経て、刻苦研磨に一大文法書を著はされり。古今の文法書を參酌して、其精を抜き、其弊を去られたるは勿論、其體裁の精麗詳密なるも、古人未だの考案多きは、實に此書の特色なり。本書出版日稍後とも既に都下に在りて、各學校の教科書に採用せられしのみならず、各地の高等學校、師範學校、中學校、高等女學校の教科及び參考書として、目下陸續採用の恩命に接し居り。

第一高等學校教授落合直文先生 合著 (文部省 檢定済)

中等 日本文典

全壹冊洋裝
正皮金字入
正價七拾錢
郵税拾錢

古來往々邦文の不規律にして、統一なきを難するものあるは、主として完全なる文典の書なきに依れり、文を學ぶ者の文典に待つある、猶航海者の羅針盤に依るが如く、はた船舶の舵に待つことあるが如し、小中村落合兩先生が、國文學に精通せらるるは、世の凡に知悉する所なり。先生初學の爲に好書なきを慨し、切瑳研究の餘斯書を著はさる、是より桃花始めて津ありといふべし。殊に著者は多年官私の諸學校に於て、實地教授せられたるものなるを以て、中學校、師範學校、其他高等諸學校、教科用書として、尤も適當無比なるものなり。

本書既に各府縣諸學校の教科用書に採出せられ 改版貳拾有餘に至れり。

帝國大學卒業 秦 政治郎君著

中等 萬國地理

全壹冊洋裝
正皮金字入
正價七拾五錢
郵税拾貳錢

本書著者多年大學にあり、後久しく職を地理局に奉し、官務の傍ら佛人コルランリニ氏の宇宙地理書に基き、其他最近の原書に依り、各國の國勢の綱領を示し我國關係の輕重により、其簡細の度を異にせるが如き、他の普通地理書とは大に其類を異にする所なり。實に中等教育に適當なる教科書なるのみならず、又何人にも一讀せざるべからざる其地理書なり。高等師範農學士 稻垣乙丙君著 (文部省 檢定済)

農學階梯

全壹冊洋裝
正皮金字入
正價七拾五錢
郵税拾錢

農の學たる廣くして大なり、初學者望洋の嘆なきこと能はず、教育者も亦教導の針路に惑へり、稻垣農學士、夙に之を憂ひ、多年研究、乃ちこゝに此の階梯の著あり、農家先づ此書を讀まば、能く進んで幾多の農書を理解するを得べく、教師よく此書を開せば、依りて以て直ちに其兒童を教導するを得べし。本書の文平易にして簡明、而も其説述は甚だ懇切を極む。惟ふに本書は各尋常師範學校に於ける初年の好教科用書たるべく、また普通農家の寶典たるべし。

農學士 大内健君著 (文部省 檢定済)

中等 農學通論

全壹冊洋裝
正皮金字入
正價金九拾錢
郵税拾貳錢

學問の深淵と論理の精密とを以て、世に聞へたる大内農學士は、農學の放漫杜撰なるを慨して、初學者の爲めに本書を著述す。本書は陳腐の舊序次に據らず、専ら科學の順序を標準として新に機軸を出し、簡より繁に入り、理論より應用に進むの則を趁ふて、先づ氣候土壤を論じ、次に實用應用法を詳述し、而して愈々繁となり、應用となりて、農用植物に始まり、農用動物に終る。其序次井然、論理明快、引例博宥適實、行文亦簡潔にして、中學校、師範學校、農學校等の好教科書たるべきは勿論、凡そ世の學者實業家たるものも、亦以て裨益を得べきものなり。本書は既に各府縣中學校師範學校の教科書參考書に採用せられたり

文學士 高山林次郎君著

世界文明史

全壹册洋裝五拾五錢
上正郵稅價稅洋裝五拾八錢
並製郵稅價稅洋裝五拾八錢
並製郵稅價稅洋裝五拾八錢

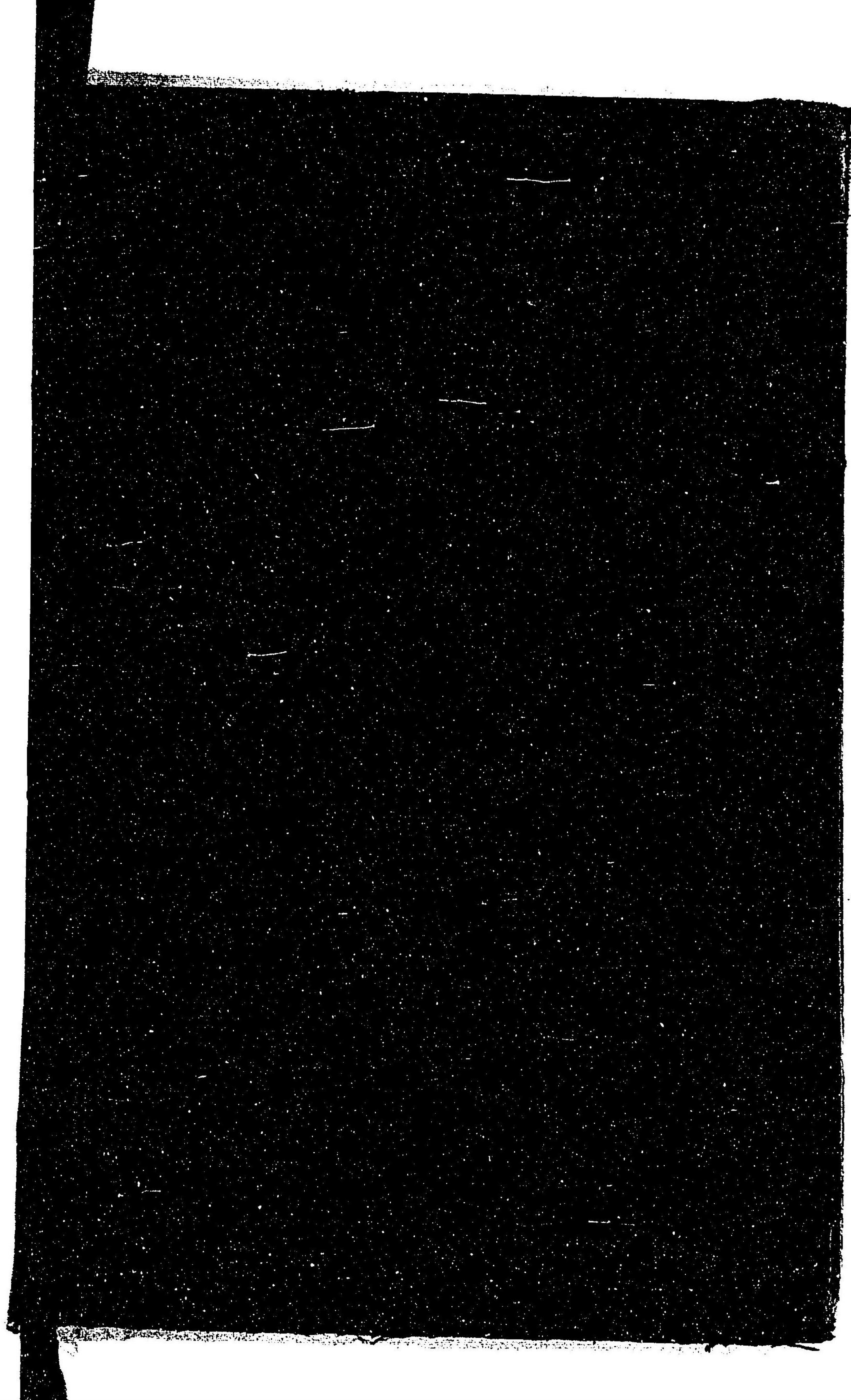
近來歴史の著譯一にして足らず、而かも悉く政治史のみ。唯往年ギンソ一氏の原著西洋文明史の翻譯を外にして、未だ一卷の文明史無なきなり。是豈本邦史學の一大欠陥に非ずや。人類生活統一的歴史なり、歴史的發展の眞精神は是により釋了を得べし。從來本邦學者の手に成れる歴史の多くは、單に事實を駢記して、是を平度と方處に繋げたるもの。讀むもの固有名詞の送迎に忙殺せられて、遂に史的發展の眞精神を會得するに由無し。是れ大に恨とすべし。爲めなり。乃ち筆を有史以前の民族に起し、佛主として哲學、宗教、文藝、政治より東

西歴史の隱微を描破と擬す。殊に基督教と西洋歴史との關係に就ては、著者自ら其簡明痛切を負ふ。庶幾くは讀者をして目睹指顧の概あらしめむか。參考該博、用意慎密の二點は、著者敢て其力を惜まざるなり。傳記、記事、編年の外に眞正の歴史あること

と知らむと欲する者は請ふ本書を讀め。若し夫れ佛蘭西革命以後、十九世紀人文の歴史に到り乃ち筆を起して別に一卷を作り本書と雖、更に筆を起し相殺がしめむと欲す。

乃ち筆を起して別に一卷を作り本書と雖、更に筆を起し相殺がしめむと欲す。

79
221



003393-000-9

79-22

東洋歴史

木寺 柳次郎/著

M31

ACC-1916



